



わからなさ友達になる

りゅうこくブックス
140

龍谷大学宗教部

わからなさ友達になる

龍谷大学「建学の精神」

龍谷大学の「建学の精神」は「浄土真宗の精神」です。

浄土真宗の精神とは、生きとし生けるもの全てを、迷いから悟りへ転換させたいという阿弥陀仏の誓願に他なりません。

迷いとは、自己中心的な見方によって、真実を知らずに自ら苦しみをつくり出しているあり方です。悟りとは自己中心性を離れ、ありのままのすがたをありのままに見ることのできる真実の安らぎのあり方です。

阿弥陀仏の願いに照らされ、自らの自己中心性が顕わにされることにおいて、初めて自己の思想・観点・価値観等を絶対視する硬直した視点から解放され、広く柔らかな視野を獲得することができるのです。

本学は、阿弥陀仏の願いに生かされ、真実の道を歩まれた親鸞聖人の生き方に学び、「真実を求め、真実に生き、真実を顕かにする」ことのできる人間を育成します。このことを実現できる心として以下5項目にまとめています。これらはみな、建学の精神あってこそのものであり、生き方です。

すべてのいのちを大切にする「平等」の心

真実を求め真実に生きる「自立」の心

常にわが身をかえりみる「内省」の心

生かされていることへの「感謝」の心

人類の対話と共存を願う「平和」の心

目次

現代社会における仏教の存在価値

佐々木 閑 5

わからなさと言達になる

小山田 徹 33

〈弱いロボット〉から考える

人・社会・生きること

岡田美智男 61

石ころも黄金^{こがね}に。

泥の中でこそ咲く蓮の花。

志賀 浄邦 93

かけがえのあるもの

嵩 宣也 109

龍谷大学宗教部は、大学内外からお招きした講師の講話・講演を活字化し、「建学の精神」を普及し体現するために『りゅうこくブックス』を刊行しております。

宗教部主催の法要・講演会には以下のようなものがあります。

- ・授業期間中 毎月十五日 深草学舎 顕真館にて お逮夜法要
- ・授業期間中 毎月十六日 大宮学舎 本館にて ご命日法要
- ・授業期間中 毎月二十一日 瀬田学舎 樹心館にて ご生誕法要
- ・毎期一回水曜日 顕真アワー
- ・五月二十一日 降誕会
- ・十月十八日 報恩講
- ・公開講演会 など

ブックスを講読していただくとともに、可能であれば各会場にもおまいりくださいませ。

（二〇二五年十月十八日 報恩講 深草学舎）

現代社会における仏教の存在価値

佐々木 閑

（花園大学 特別教授）



佐々木 閑（ささき しずか）

1956年、福井県出身。

京都大学大学院文学研究科博士課程満期退学。米国カリフォルニア大学バークレー校南及び東南アジア言語学科Ph.D. 留学後、花園大学文学部教授に着任。

現在、花園大学文学部特任教授兼特別教授。

【著作】

『インド仏教変移論』（大蔵出版／2000）

『ブッダ 真理のことは』（NHK出版／2012）

『大乘仏教 ブッダの教えはどこへ向かうのか』（NHK出版／2019）

『宗教の本性 誰が「私」を救うのか』（NHK出版／2021）

『世界史のリテラシー 仏教は、いかにして多様化したか 部派仏教の成立』
(NHK出版／2025)

『AIという鏡 人の価値とは何か』（共著、法蔵館／2026）

ほか多数。

自己紹介

ご紹介にあずかりました佐々木でございます。よろしくお願いいたします。両側から睨まれているようで、少し喋りにくいですね（笑）。このような場合は初めてですので、どうなるか分かりませんが、どうぞ皆様気楽にお聞きください。お手元に資料のようなものをお配りしておりますが、これをそのまま読み上げるわけではございません。一応の道筋をたどるような形でお話を申し上げますので、お聞きいただければ幸いです。

私はご縁、いわゆる仏縁がありまして、現在は浄土真宗高田派の僧侶をしております。しかし、実際の研究領域というか、自分が最も興味を持っているのは、仏教の大元であるお釈迦様、そしてインド仏教です。私自身は自分のことを「釈迦の信者」、あるいは「釈迦教徒」と呼んでいます。私一人しかいないので団体を作ることはできませんが、釈迦教の信者でございます。本日はこのような時間をいただきましたが、初めは誰が私を呼んだのか分かりませんでした。ところが昨日、入澤理事長から「俺が呼んだんだ」というメールが届き、ようやく入澤さん（現・龍谷大学理事長）が私を招いてくださったのだと分かりました（笑）。ありがたいことに、大学院時代か

らの大変親しい友人です。このように長く友人関係が続いているのも、ひとつの仏縁だと感謝しております。

さて、今日のお話についてですが、普段、皆様は浄土真宗のありがたいお話をいつもお聞きになつてゐると思います。阿弥陀様や極樂、あるいは第十八願といったお話です。しかし、私はお釈迦様の信者であり、すべての仏教を素晴らしいと思いつつも、やはりお釈迦様が大好きです。そこで今日は、皆様が普段聞いておられる世界から少し視野を広げ、お釈迦様という人が一体どのようなことを私たちに示してくれたのかをお話ししたいと思います。

それが実は、まわりまわって「二十一世紀のA Iによる新しい時代のあり方」と、極めて密接に関係してくるのです。お釈迦様が生まれたのは早すぎたのではないかと思うほど、不思議な一致を感じます。お釈迦様は、まさに現代の我々の生き方を表すお話をしてくださったのだと思います。そういうわけで、ここから一度二五〇〇年前へとタイムスリップし、また現代へと戻ってくるといふ、大変忙しい旅をしていただくこととなります。時間も限られておりますので、大急ぎでお話を始めましょう。

人間特有の「悩み」

仏教は言うまでもなく宗教の一つです。私はいつも、宗教とは一体どういうものなのかを考えています。たとえば、犬や猫に宗教はあるのだろうか、と考えることもあります。私の見た限りでは、あまりないように思います。宗教的に悩んでいる猫や、人生の苦しみを感じて道端で突然立ち止まる犬などは、見たことがありません。彼らは外界からの刺激に反応しながら生きているだけではないでしょうか。

それに対して、人間は年齢を重ねるにつれてだんだんと顔つきが変わってきます。どうなるかというと、悩み多き顔になっていくのです。一歳から五歳くらいのお子さんの顔を見ていても、悩んでいる子はあまりいません。保育園ではみんな楽しそうに遊んでいます。それが小学校、中学校と進むにつれて、だんだんといろんな悩みが出てきます。そして私くらいの年齢になると、顔にシワが寄り、「生きるのが辛い」といった顔をして毎日歩くようになるわけです。

どうも人間という生き物は、他の動物と違って、年をとるに従って次第に悩みが増えてくるように思います。なぜ人間だけが、年をとるとだんだん辛くなっていくのでしょうか。実は、その

理由はそれほど難しくありません。それは、人間の頭が良いからです。頭が良いとどういうことが起こるかというところ、「これから起こること」を推測するようになります。つまり、先行きを考える力があるのです。

人間にとって、これは本来とても良いことです。犬や猫、熊や牛などが、自分の先行きを考えて生きている様子はあまり見られません。しかし人間だけは、自分がこれからどうなるかを確信し、推測することができます。ここにいらっしゃる皆様の中で、「私は絶対に死なない」と思っている人はおそらくいないでしょう。もしおられたら、ちょっと手を挙げていただくと面白いのですが（笑）。そうなのです、みんな自分がいつか死ぬことを知っているのです。しかし、この中で死を体験した人は誰もいません。全員がまだ体験したことのない将来において、「自分は死ぬ」ということに確信を持って生きているという、非常に奇妙な状況にあるわけです。

私たちが死を確信できる理由

私たちはなぜ、自分が死ぬと分かるのでしょうか。それはやはり推測しているからです。一つ

の理由は、自分の周りの人たちが次々に死んでいくことです。一人として「現在三五〇歳です」なんていう人はおらず、みんな一〇〇歳を超えたあたりで亡くなっていきます。それを見ていれば、「自分もその中の一人なのだから、おそらく死ぬだろう」と推測できます。

もう一つの理由は、自分自身の変化です。かつて小さくて可愛かった赤ちゃんが、今ではこのような姿になっています。毎日鏡を見てみると少しずつですがシワも増え、他の人と同じように自分自身の体も老化していきます。そうして変わっていく様子を見ていれば、当然ながら「自分だけが例外である」とは到底思えないため、みんな死ぬのだと納得するわけです。

「自分も死ぬのだ」という確信を持つて生きている——当たり前のことを言っているようですが、このような生物は人間しかないと思います。他の生命体は、その時々への刺激に反応して命を繋ぐ行動をとるだけです。危なければ逃げ、餌があれば食べる。それを毎日繰り返すだけでそれ以上のことは考えていません。しかし人間は、やはり頭が良すぎるのでしょうか。ものすごい推測能力によって、自分の将来には老病死という不幸が待っていると理解しながら生きている。そういう存在なのです。

もちろん、そんなことばかり考えていたら、絶望のどん底に落ちて生きていけなくなります。

「自分はどんな不幸になっていくのだ」「年をとって病気になって死んでいくのだ」と毎日考えていたら、電車にすら乗れません。切符を買うたびに涙が出てしまいます。

それなのに、なぜ私たちがニコニコと生きていられるのかというと、それは脳が私たちを守ってくれているからです。脳の働きによって、私たちが絶望しないよう、色々と手配がなされています。その働きにおける大きな特徴は、最も自分にとって都合が悪く不幸である事柄を脳裏に浮かべないようにすることです。そして、それよりもはるかに軽微なことであっても、自分にとって都合の良いことの方を先に頭に浮かべせるのです。

私たちは、そのような働きによって何とか命を繋いでいる状態です。ですから本当のことを言えば、毎日寿命が一日ずつ縮んでいくことや病気になっていくことを自覚して、暗く生きていかなければならないはずですが、そのようなことは頭に浮かびません。先に浮かんでくるのは、「今日どこへ遊びに行こうか」とか「温泉につかって楽しもう」といった、目の前のちょっとした楽しみです。脳がそのように作られているのです。そうしないと生きていけないからですね。おそらく、そうではない個体は淘汰されて生き残れなかったのでしょう。このように人間は、頭の良さによって得た不幸を自らの頭の良さによって何とかしのぎながら生きている生命体なのです。

お釈迦様の出家の動機

もちろん、この防衛システムが壊れてしまうこともあります。壊れるとどうなるかと言いますと、これは私も体験があるから分かるのですが、鬱になるのです。鬱になるとはどういうことかという、「楽しいことが先に頭に浮かんで生きる力を手に入れる」というシステムが壊れてしまうため、先に辛いことばかりが浮かんでくるようになります。そして、目先の楽しみがその苦しみを打ち消すという働きも失われてしまうため、生きていること自体が苦しみの連続になっていくのです。私は、鬱とはそのような脳内システムの変容だろうと思っています。

何が言いたいのかというと、お釈迦様という人はまさにそこから出発しているのです。一度は鬱のような状態になり、「もう生きていく希望がない」という境地を体験した上で、その状態からどうすれば私たちは復活できるのかを考えた人なのです。ご存知かと思いますが、お釈迦様は若い頃、王子としてチャホヤされ、何の不足もなく生きていました。そんな幸せな時期に、ある出来事に出会ったことで人生が転換し、もはや王子として生きていくことなど何の意味もなく、「もっと正しい本当の幸せ、本当の安楽を得る道を選ばねばならない」と思い立った事件が

あります。これが有名な「四門出遊」という事件です。王子として何不自由なく暮らしていたお釈迦様が、ある時、お城の東西南北にある門のいずれかから外へ出た際、それまで出会ったことのないものに出会ったというお話です。この話を私なりに解釈しながら、その本意をご説明しましょう。

四門出遊——「我が事」としての実感

最初に出会ったのは「老人」でした。それまでお釈迦様は老人を見たことがなかったのです。ただし、「老人を見たことがない」というのは歴史的には怪しいため、このエピソードは間違いなく作り話でしょう。しかし、極めて優れたお話です。なぜなら、我々自身が本当の人生のあり方を見つめるその瞬間を、鮮やかに伝えてくれる話だからです。ですから、見事によくできたお話なのです。歴史的に正しいかどうかではなく、体験的真相を伝えているという意味において「正しい話」なのです。

さて、四門出遊のお話は、これまで出会ったことのなかった老人に初めて出会った釈迦が、横にいた家来に「あれは何者だ」と尋ねるシーンから始まります。家来が「あれは老人でございます」と答えると、釈迦は驚いて「老人とは何だ。腰が曲がり、しわくちやで、よたよた歩いていくが、あれは何者なのだ」と再び問いかけます。家来は「あれは、人が一年ずつ歳をとっていった姿です。六十、七十、八十歳という年齢になりますと、誰もがあのようになり、不自由でかわいそうな状態になるのでございます」と答えました。

そして、次に返したお釈迦様の言葉が極めて重要なのです。「そのような老人に、わしもなるのだろうか」と。家来は当然知っていますから、「そりゃそうですよ。いくら王子様であろうとも、誰もが年寄りになるのは決まっています」と答えます。お釈迦様にとっては、これが大変なショックでした。

何がショックだったのかと言いますと、老人を見たこと自体がショックなのではありません。「大変だなあ、苦しそうだなあ」と他人事として見ていた老人に、他ならぬ自分自身がなるのだと気づいたことです。自分自身にその不幸や苦しみが実感された、この瞬間が非常に重要なのです。これは現代の私たちにも通じることです。様々な災害が起こり、辛い目に遭ったり苦しい思

いをしたりしている人の姿がテレビの向こうに映し出されます。それを見て私たちは「世の中には辛いことがいっぱいあるんだな」「みんな苦しいことがあるんだな。私だっていつかはそんな風になるかもしれない」とは一応思いますが、それを実感してはいません。テレビの向こうの話であり、どこか他人事なのです。ところが、その災難が自分自身に降りかかってきたり、ある日突然「余命三ヶ月」だと宣告されたり、あるいは自分の家がつぶれて家族を亡くしたりしたとき、初めて私たちはテレビの向こうにあった他人事が実は自分のことだったのだという実感を持ちます。世の中に様々な災害や不幸があることは誰でも知っていますし、それぞれ悪い出来事もあるだろうとは思っていますが、それが自分自身に降りかかった時の実感というのは全くの別物なのです。

さて、話を元に戻しますが「四門出遊」は四つの門ですから、残りの門を出るたびにさらに過酷な現実を目にすることになります。最初の門を出て老人に出会った後、次の門から出ると今度は「病人」に出会います。釈迦がその不自由な姿で苦しむ者の正体を家来に尋ねると、家来は「これは病人であり、年齢に関係なく、何かのきっかけで誰もがこのように苦しむ可能性があるのです」と説明します。それを聞いた釈迦は、自分も同じように苦しむことになるのかと問いかけま

した。家来は、それがいつかは分らないとしつつも、「必ずいつか病気はあなたにも襲いかかってくるでしょう」と告げるのでした。

そして「老」「病」と続きましたから、三番目の門から出れば、言うまでもなく「お葬式（死者）」に出会うわけです。インドのお葬式はお棺を使いませんから、ご遺体をそのまま板の上に乘せて街の中を歩きます。そのため、ご遺体の顔もすべて見えます。それを見たお釈迦様が、あれは何者かと尋ねると、家来はあれが死人であると答えます。「死ぬとはどういうことか」というお釈迦様の問いに対し、家来は次のように説明しました。人が生まれてから七十年、八十年と生きてきて、それまでに積み上げてきたもの、手に入れたもの、自分の世界だと思っていたもののすべてを一瞬にして手放す——その瞬間こそが「死」なのだと。それを聞いたお釈迦様は、「わしも死ぬのだろうか」とまた深く悩むのです。

出家修行者との出会いと「幸福の価値観」の転換

しかし、門が四つあったおかげでお釈迦様は救われました。もし門が三つだけだったなら、先

ほど私が申し上げたように「本当の人生のあり方はただ苦しみである」という結論だけで終わってしまいます。おそらく門が三つしかなければ、お釈迦様は自ら命を絶っていたのではないかと私は思っています。四つ目があって本当によかったのです。

四つ目の門を出たときに出会ったのが、当時インドにたくさんいた「出家修行者」でした。もちろんまだ仏教は誕生していませんから、その人は仏教のお坊さんではありませんが、当時のインドに数多くいた出家修行者の一人に出会ったのです。その姿は、髪も髭もボサボサで、裸足で杖をつき、ボロボロの衣を一枚まとって歩いているというものでした。

釈迦がその風体を妙に思つて尋ねると、家来は「出家修行者でございます」と答えます。そして、あの者は普通の暮らしを捨て、釈迦が悩んでいるような「老・病・死」の苦しみから逃れる道、すなわちこの過酷な運命の中でいかに安楽に生きられるかを探して歩いているのだと説明しました。釈迦が「あの人は本当の幸せを願っているのか」と問いかけると、家来は肯定しつつも、王子である釈迦の幸福と修行者の幸福は基準がまったく異なると告げます。王子の幸せはお金や地位など「所有しているもの」で成り立っていますが、いくら多くのものを持っても、老病死という避けて通れない生物の運命を贖うことはできません。では修行者の幸福とは何なのか。

家来は、それこそが老病死という避けられぬ運命の中にありながらも、心安らかに生きる道を探求することそれ自体なのだと教えます。今より良いものや快適な暮らしを求めるのではなく、背負った苦しみから逃れることこそが本当の幸せである。だからこそ、あの修行者は何も持たない姿で生きているのだと家来は締めくくりました。

出家と「悟り」——老病死を受け入れた上での安楽

当然、そこまで言われたお釈迦様は、もはや王子としてとどまるわけにはいきませんでした。キンキラキンの服を着ていても、何の幸せも感じられなくなってしまったのです。ですから先ほど申し上げたように、それまで他人事として遠くから見ていた不幸が自分自身に降りかかるものとして実感されたとき、そこからどうやって逃れるか、どうやって本当の幸福を掴むのかという、極めて現実的で逼迫した状態にお釈迦様は置かれたわけです。そんな時に、少しぐらい快適で贅沢な暮らしができたところで、何の意味も持たなくなりそうです。むしろ、そのような暮らしをしていること自体が苦痛になり、自分はなぜこのようなぬるま湯につかるようにして生きているのか、

こんなことをしている場合ではないはずだ、という焦燥感に駆られるのは当然のことです。

そしてお釈迦様は出家し、何年もの修行を経て悟りを開き、ブッダ（仏陀）への道を進まれます。最終的に「悟りを開く」とはどういうことかというところ、まさに今申し上げた通りです。老病死を背負い、「人生の本質には苦しみがある」という閉塞感にさいなまれる生き方から、逃れる道を見つけたということです。その道を体得し、実践できるようになった状態を「悟りを開いた」と言います。お釈迦様は菩提樹の下で仏陀になられたとき、その本当の答えを手に入れ、実際に安樂の境地へ達せられたのです。

では、その回答とは一体どこにあるのでしょうか。大前提として、「老病死というものが私たちに襲いかかってくる」という事実は免れないため、それをまずは受け入れねばなりません。世の中の宗教には、この前提を受け入れないものもあります。たとえば「信じれば死なない」と謳う宗教、何かを唱えると生き返ると主張する怪しい宗教、あるいは何かを信じればすべての病気が治るといった宗教もあります。もっと言えば、「信じればお金が儲かる」という宗教もあります。しかし、これまでお話ししてきたお釈迦様の修行の道を振り返れば、仏教がそのような宗教ではないことははっきりとお分かりいただけると思います。もしお金が儲かることが幸せの宗教であ

るなら、お釈迦様は出家などせず、王子のままでいたはずです。なぜなら、すでに一番お金を持っているのですから。「自分は幸せだ」と思ってそのまま生きていけばよかったわけです。しかし、幸せの本質はそんなこととまったく関係がないと分かったからこそ出家されたのです。ですから、仏教のいう幸せとは、それによって「今よりも快適でコンフォータブルな生活が手に入る」というものではありません。今生きていることが苦しいと感じる人たちが、その苦しみから逃れることこそが、仏教の最終目的なのです。

仏教の本意——絶望し、苦しむ人のために開かれた教え

このことが分かれば、仏教は、全世界の人類をすべて仏教徒にしようという目的で生まれた宗教ではないということが理解できます。なぜなら世の中には、お金がたくさんあることや色々なものが手に入ることを幸せだと考える人が山ほどいるからです。愛する家族がいて、庭付きの一戸建てを建てて、良い会社に勤める——そのような生き方を幸せだと考えることは、まったく間違っていないです。人として当然の思いです。それは人間が本来持っている欲望から生まれる幸福

感であり、決して悪いことはありません。人間は誰もが生まれながらに欲望を持って生まれてくるのですから、そう考えるのはごく自然なことです。

しかし、そのような価値観が、生きている間に壊れてしまう人もいます。たとえば、とても幸せで何不自由なく生活していた人のところへ突然津波が押し寄せてきて、それまで積み上げてきた家や財産がすべて流されてしまう。あるいは、大切な家族が目の前で亡くなってしまう。そのような壮絶な体験をした人は、もはや「快適な生活を実現することが幸せだ」というかつての幸福感では生きていくことができなくなります。つまり、人生の本当の苦しみに出会ってしまった人は、目先の見せかけの喜びによっては心を贖うことができないのです。

そのような経験をされた方が、時々テレビに出て「あの時から時間が止まってしまいました」とおっしゃることがあります。それはどういうことかという点、もう人生を楽しくしてくれるようなものは何もなく、当時の苦しみがずっと続いているということです。その苦しみを打ち消してくれるような喜びが、どこにも見つからない状態なのです。世の中には、そのように苦しんでいる方もおられます。その一方で、幸せに生きている人もいます。仏教は、幸せに生きている人の耳元へ行って「あなたは不幸ですよ」などと言う宗教ではありません。幸せな人は、それで

いいのです。

しかし、そうではない人もたくさんいます。お釈迦様は自分が悟った方法をみんなに広めようとしたのですが、世間の多くの人々が世俗的な普通の幸せを望んでいる以上、自分の話を聞いてくれる人などほとんどいないのではないかと最初は悩まれました。それでも、苦しい思いをして絶望の中に生きている人も確かに存在します。そのような人々のためにこそ自らの悟りの道は役に立つはずだと考え、自身の教えを必要とし、それによって救われる人のために教えを広めるのだと決意されたのです。これはブッダの伝記にもはっきりと書かれていることです。

悟りを開いた直後、梵天という神様がわざわざやってきて、お釈迦様にこのように懇願しました。「普通の人々はあまり耳を傾けないかもしれませんが、聞いてくれる人がいれば、その人は間違ひなくあなたの教えによって救われます。ですから、たとえ少数の人のためであっても、どうか立ち上がってお説法をしてください」と。これこそが、仏教という宗教の最も核心にある本意です。すなわち、世の中に絶望し、生きることが苦しいと感じている人のために生まれてきたのが仏教なのです。

「私」と諸法無我

では、お釈迦様が悟られた内容についてですが、一体私たちの不幸の大元とは何なのでしょう。 「老病死」が苦しいことは分かりますが、なぜそれが不幸の根本原因になるのかを突き詰めていくと、ただ単に「年をとって腰が曲がるから辛い」とか「病気になって痛いから辛い」という肉体的な理由だけではないことが分かります。 そうではなく、老病死はすべて、「私」が持っている世界」や「私」が手に入れた手放したくないもの」を無理やり奪い去っていく作用を持っているから辛いのです。

「老」は、若さが持っていた自由を奪います。それを奪われたくないから「いつまでも若いままにいたい」という希望にしがみつくのですが、しがみついているものから無理やり引き剥がされて希望を奪われていく、これこそが苦しみです。「病」は、健康な体を持っていた自由な暮らしを奪います。「死」は、それまで自分が築き上げてきた人生そのものを無理やり奪い去ります。この「奪われる」というプロセスにこそ、実は最大の苦しみの原因があると、お釈迦様は見抜かれました。

では、その苦しみから逃れるにはどうすればよいのでしょうか。「奪われるのが嫌なら、奪われないようにすればいい」という考え方もありますが、それは不可能です。なぜなら、老・病・死は必ず訪れるからです。必ず奪われるという現実を受け入れざるを得ないのだとすれば、次にはそれを「苦しみ」にしないためにはどうすればよいか、という話になります。

「奪われるけれども苦しみにならない」とは、どういうことでしょうか。それは、「奪われる」という被害者意識のような思いがなくなったとき、つまり、物を失うことを「奪われる」と捉えるのではなく、「自然になくなっていくもの（諸行無常）」として受け入れられるようになったときの状態です。そのとき初めて、私たちは「しがみつき」の心（執着）が生み出す苦しみから逃れることができます。

そのしがみつきの根源は一体なんでしょうか。それは「私」です。「これが私のものだ」「これが私自身だ」という強い自我に他なりません。「世の中の中心にいるのは私であり、私が何かを手に入れることこそが幸せだ」というように、すべてを私中心に考えてしまうその思考の中にこそ、しがみつきの生まれます。そしてそれが老病死と出会うことによって、大きな苦しみの原因となるのです。ですから、一番の大元をたどれば、「私中心の世界」をどれだけ小さく削ること

ができるか、という話になります。お釈迦様は『私（不変の自己）』というもののへの執着自体が不幸の根源である」とおっしゃいました。これを、お釈迦様は「諸法無我」という言葉で私たちに説いてくださったのです。

現代の課題 —— AI時代の到来と人間の傲慢さの崩壊

ここで話を現代に戻します。我々は今、AI時代への変革期にあります。これからのAI時代において何が重要かと言いますと、自分の人生の先行きを考える際、AIによって社会がどのように変化するかを正しく認識した上で自分の人生を見つめなければ、大失敗や大きなつまづきにつながる可能性がある、ということです。これを今、皆様にお伝えしておきます。

これからの時代、過去の経験はまったく当てになりません。これまで誰もが良い仕事だと言っていた流行りの職業や、花形の仕事が次々と消えていきます。ですから、これから職業を選択するのは極めて難しく、危険な状況になると言えます。なぜなら、AIは間違いなく我々人間の知性を超えるからです。よく耳にする意見として、「AIはいくら頑張っても所詮は機械だから心

がない。人間には心があるからAIに負けるはずがない。最後は人間の心があるから大丈夫だ」というものがありますが、これは間違いです。そして、それが間違いであるということは、すでにお釈迦様が指摘しています。

先ほど申し上げた「諸法無我」とは、「自分の中に、自分だけの独自の何かがあるという考え方は捨てなさい」という教えです。我々は、単に様々な因縁が集まってできている「作用の集まり」にすぎず、その中のどこを探しても「私の本質」など存在しないというのが、仏教の基本中の基本です。簡単に言えば、魂のようなものなど存在しないということです。

仏教の教えによれば、私たちはどうしても自分の内側に他者よりも優れた独自の何かがあると思いたがり、それを様々な言葉で表現します。「魂」と呼んだり、「本当の自己」「本当の自分」と呼んでみたり、あるいは「優れた人間性」と言ってみたりします。しかし、実はそれらはすべて架空のものであり、私がこの世の中心だと思いたいがために作り出したシンボルにすぎません。

これまでは、このような話をして皆様「そんなものですか」と聞き流すことができたかもしれませんが、AIの登場によって、この問題はいよいよ身に迫る現実となってきました。なぜな

ら、AIはこの世で最も高い知性を持つ存在だからです。これまで人間は、人類こそがこの世で一番知性の高い生物だと鼻高々に生きてきました。「万物の霊長」などと言い、人間ほど知性の高い生き物は他にいないと信じてきたのです。だからこそ、「人間の心」という言葉を、時として「人間だけが一番偉いのだ」という傲慢さを表すために使ってきました。「人間には心があるが、他のものには心がない」という言い方自体が、その傲慢さの表れなのです。しかし、AIの登場によって、この傲慢さは今、完全に打ち砕かれようとしています。AIの方が人間よりも知性が高く、感性も鋭い、そのような存在になってきているのです。

AIの感性と、仏教が説く真の幸福

私の息子は数学者なのですが、AIの研究をしています。この間、彼がAIを使って作った音楽と映像と詩を組み合わせた動画を見せてもらいました。その映像は素晴らしい感性で満ちており、AIが紡ぎ出した詩も、これまでに聞いたことがないほど鋭い感性で、制作者の詩心がそのまま伝わってくるような見事なものでした。私は小学生の頃からずっと詩を書いており、詩には

少し自信があったのですが、その私から見ても、AIの書いた詩は素晴らしいものでした。本当に感動したのです。

「これ、どうやって作ったんだ」と息子に尋ねると、「父さん、これ一日で作ったんだよ」と言われました。息子が特別なプログラミングをしたわけではなく、AIと言葉でやりとりをしながら「こんなイメージで作って、あんな要素を入れて」と指示を出しているうちに、それだけのクオリティのものが出来上がったのです。それは、これまでに見たことがないほど感性豊かな作品でした。ですから「AIには心がない」などというのは、実際のAIを知らない人の言葉です。現実には、AIに「(固定的な)心」がないのと同じように、人間にもそんな心(固定不変の実体)など存在しないのです。それこそがまさに「諸法無我」の世界です。私たちは「心がある、ある」と言っていますが、実際には「心があると思ひ込みたい」という執着があるだけにすぎません。

これからの時代、人類はこの世で「二番目の知性体」になります。もう一番になることは無理です。トップの座はAIに取られます。だからこそ私たちは、これから「他者と競争して一番になること」を基準にして、自分の幸せを考えてはいけません。つまり、他のものと比較し、競争に勝つことによって得られる世俗的な幸福感は、もう通用しなくなるということです。

現在の世の中の幸福感は、そのほとんどが比較の中から生まれています。「人よりお金があるから幸せだ」とか「人が持っていないものを持っているから幸せだ」というように、他者との比較で成り立っていますが、その比較自体が、もはや通用しなくなる時代が来るのです。

現代における仏教の意義

そのような世界の中で、私たちがどうすれば安楽に、平穩に生きていけるのか。その答えこそが、お釈迦様の教えそのもののなのです。諸法無我の世界、すなわち「自分」という強固な執着を持たない中で、どのように本当の幸福を実現するかは、すでにお釈迦様が説いておられます。

それは何かと言いますと、自分自身が向上し変わっていくこと、あるいは自分の価値観が変わっていくことを内省し、実感することこそが幸福の原点だということです。他人と比べたところで、本当の幸福にはなりません。幸福の原点とは、「昨日の自分」と「今日の自分」を比べることです。「その分だけ、私は物事がよく見えるようになりました」「人の気持ちがよく分かるようになりました」「世の中が正しく見えるようになりました」というように、自分自身のあり方

が深まっていくのを確認していくこと、これこそがこれからの時代における幸福の鍵となります。そしてそれは、お釈迦様が仏教に生きる人々へ示された道そのものです。たとえば、浄土真宗における阿弥陀様への信仰とは何かと言えば、それまで自分中心になって「俺が、俺が」と自力で何とかしようともがいていた人が、阿弥陀様の本願に救われ、すべてをお任せしたとき、その人の中から強固な自我が消え去っていくことです。

そのような生き方に至った人は、もはや他人と比べることで幸せになろうとは思いません。「昨日持っていなかったものが手に入って快適になったから幸せだ」などということも思わなくなります。そうではなく、「自分が変えられていった」というその幸福感の中で生きることができのです。

今こそ、私たちは「他者との比較」という見せかけの自我を揺るがされ、それまでの生き方が通用しなくなった時代を迎えています。だからこそ、この現代において、仏教という教えは大変深い意味を持つてくるのだろうと確信しております。時間いっぱいお話をさせていただきました。またご縁がありましたら、お会いすることもあるでしょう。ありがとうございました。

【文責宗教部】

（二〇二六年五月二十一日 創立記念・親鸞聖人降誕会法要 深草学舎）

わからなさ友達になる

小山田 徹

（京都市立芸術大学 理事長・学長）



小山田 徹（こやまだ とおる）

1961年、鹿児島県出身。

京都市立芸術大学美術学部美術科日本画専攻卒業。在学中に結成したパフォーマンスグループ「ダムタイプ」の創設メンバーとして作品制作を行い、『pH』や『S/N』などの作品を国内外に向け発信。またAIDSやセクシャリティに関わる問題に向き合う活動を多くの人々で行う。

「共有空間の獲得」をキーワードとし、人々を巻き込みながら空間そのものを体験させる独自のアート手法を探究。焚き火場など、人々が集い関わる場を生み出し、社会に実装される共有空間が持つ新たな可能性を探究。2005年第2回アサヒビール芸術賞受賞。
現在、京都市立芸術大学理事長・学長。

はじめに — 闘病生活と芸術による支え

皆様、こんにちは。京都市立芸術大学で理事長・学長を務めております、小山田徹と申します。本日はこのような素晴らしい会にお招きいただき心より感謝申し上げます。

先ほどのご紹介にもありました通り、本学のすぐ隣に位置する共創HUBにて龍谷大学の皆様とご一緒する運びとなりました。この貴重な機会に、私たちが探求する「芸術」と皆様が向き合っておられる「学問」との繋がりについてお話できれば幸いです。

私は二年前にがんを患いました。ちょうど二年前の今頃は大学病院で治療を受けていました。ステージ4の大腸がんで肝臓にも転移し、余命半年と告げられるほど重篤な状態でしたが、さまざまな治療や良き出会いに恵まれ、今は本当に奇跡的に健康な状態を保っております。その闘病中、私の精神を支えてくれたものがたくさんありました。一つはもちろん家族の絆です。もう一つは、私の教え子である学生や卒業生、そして友人である教員や作家など、多くの人々とのつながりです。そうした人々が本当に私を支えてくださいました。私たちの家には数え切れないほど多くの学生たちが訪れ、家がゼミ室のようになったこともありました。さらには、私たちの子ど

もたちのために学生が食事を作ってくれることもあり、さまざまな形で支えていただきました。

それと同時に、闘病中の私の精神を最も支えたものは、芸術における表現だったのです。

闘病中は、こんなに本を読んでよいのかと思うほど、じっくりと本を読ませていただきました。そして、さまざまな映画や映像作品にも触れました。そうした作品群がいかに私の精神を深く支えてくれていたかに気づかされたのです。翻って考えますと、これまで各地で災害が起こり、コミュニティが崩壊するような事態においても、文化や学術と呼ばれるものが人々の生活に寄り添い、再建への大きな力となってきたのだらうと、私は強く感じています。本日は、私のこれまでの活動をご紹介しながら、私たちの大学が理念として掲げている「わからなさ友達になる」という考え方についてお話しさせていただこうと思います。

「共有空間の獲得」と社会実装への歩み

私は一九六一年に鹿児島で生まれました。大学に入学するために初めて京都を訪れ、それ以来ずっと京都で活動しております。私の主な活動は、「共有空間の獲得」をテーマとして行ってお

ります。共有空間というのは、人がそこに一人存在していると、その周りには境界の曖昧な空間が広がっているという考え方です。そして、人と人が出会ったり、人と物が出会ったりすることで、それぞれが持つ空間が交わる瞬間があります。そうした出会いによって生まれる共有空間を美術という立場から改めて考え直し、社会の中に実装していくことが私の活動です。

なかでも「獲得」という言葉が非常に大事だと思っています。共有空間というのは与えられる場合もありますが、与えられた共有空間に対してはなかなか愛着を持って接することが難しいものです。自分が積極的に関わりながら共有空間が形づくられていく過程に参加していると、そこには獲得感が生まれ愛着が芽生えます。そうしたことが生まれる場合は、どのようにあるべきかという活動を基本にしております。学生時代には日本画を専攻していましたが、ちょうど世界的にパフォーマンスアートが注目され始めた時期でもあり、「ダムタイプ」というパフォーマンスグループの立ち上げに参加しました。その活動にのめり込んだ結果、大学院は中退することになったものの、このグループでの経験が私の転機となります。ある時、メンバーの一人がHIVに感染するという出来事に直面したのです。後日、本人が五十人ほどの友人へ手紙を送り、自らカミングアウトをしてくれました。これが、私たちがHIVという問題に真正面から向き合う

最初のきっかけとなりました。

当時は、H I Vという不可思議な病が世界で流行し始めており、「感染すると死んでしまう」「同性愛者の間で異様なほど広がっている」など、さまざまな噂に包まれていました。ですから私は、そのカミングアウトを受けたとき、目の前にいる友人がもうすぐ死んでしまうのではないかと思います、深い悲しみに暮れました。しかし、ずっと泣いているわけにもいかず、皆で勉強会を開いたり、話し合いを重ねたりしながら、さまざまな活動を始めようになりました。その頃から私の中では、芸術表現が社会との関わりの中で行われるものへと変わっていきました。パフォーマンスグループとしては、H I Vにまつわるさまざまな活動を作品として表現すると同時に、アクティビズムという形で社会に積極的に働きかける活動も始めました。ダムタイプの小さなオフィスには、毎日五十人ほどの友人たちが集まり、さまざまな話をしながら活動を続けていました。

しかし、あまりにも手狭になったため、移転することになります。京都大学のすぐ東側、吉田山の麓に一軒家を借り、「アーススケープ」という共有空間をつくりました。そこでさまざまな運動体が生まれ、エイズにまつわるさまざまな活動を行うようになりました。当時、行政が作成

するエイズ啓発ポスターは、本当にひどいものだったのです。パスポートで顔を隠した男性の写真が使われ、「いつてらっしやい。エイズに気をつけて。」というコピーが掲げられていました。つまり、海外に買春に行く人を対象としたメッセージだったのです。そうした「外から入ってこないようにする」という程度の認識に基づいたポスターが数多くありました。そうした状況に対して、表現者としてどのように働きかけ、変えていくかという活動が生まれました。また、ジェンダーやセクシュアリティに関わるさまざまな活動体も生まれました。さらに、新しい議論の場を提案するために、国際会議に参加することもありました。

その頃、日本で初めて開催された第十回国際AIDS学会があったのですが、当時は研究者と行政、そして製薬会社の関係者が中心の学会でした。NPOやNGOの参加は認められておらず、現場でさまざまな活動をしている人々は会議に参加できなかったのです。そこで私たちは会場に押しかけられるような形で関わりました。会場は神奈川県のパシフィコ横浜だったのですが、その出入り口前の広場を借りて、「ラブポジティブ」という企画を実施しました。それは、いわばレイヴパーティーです。会議を終えた方々は必ずその広場を通って帰られるのですが、そこで開かれているパーティーに自然と引き込まれ、一緒に参加するという形で、いわば「押しかけ交流会」

のようなことを行いました。非常に大きな盛り上がりを見せ、私たちのメッセーじもしっかりと発信することができました。その後、国際学会ではNPOの参加が認められるようになり、会議後にこうした交流会を開くことも定着していきました。

いろいろな活動をしていたのですが、専門的な活動を続けていると、その空間には無言の敷居の高さのようなものが生まれます。決して差別的なことを言うわけではないのですが、そこには漂う空気感のようなものがあるのです。二年ほどジェンダーやセクシュアリティについて語り続けてきた人たちと、初めてその空間を訪れた人との間には、どうしても温度差が生まれます。最初は誰もが来られる場所としてつくったにもかかわらず、いつの間にか専門性を帯びた人たちが集まる、入りにくい場所へと変わってしまうことに気づきました。そこで、新たな入り口をつくらうということになったのです。

それが、「ウィークエンドカフェ」という試みでした。京都大学のすぐ近くに、YMCAが運営する大学の寮があったのですが、そこには築一〇〇年を超える洋館があり、長らく使われていない空間となっていました。その洋館を皆で片付け、寮生たちに企画を持ちかけて、一緒に非営

利のオールナイトバーを開こうということになりました。しかも非認可でしたので、限りなく大きなホームパーティーに近いものを二週間に一度開催することになりました。そこには暖炉があり、焚き火もできました。また、目の前に酒屋があったため、そこで仕入れを行い、お釣りのやり取りが煩雑にならないよう金額を切り上げ、原価に近いカタチでお酒を提供していました。やがて毎回二〇〇人から三〇〇人ほどが集まる、京都では画期的な場所となりました。そこは、さまざまな議論や歓談、交流が行われる場となったのです。

当時は携帯電話がない時代でした。二週間に一度そこへ行けば、京都で会いたい人のほとんどに会える、そんな場所になっていました。そして、その頃、エイズの問題を私たちに共有してくれた友人が亡くなります。一九九五年、地下鉄サリン事件などが起こった時代でした。そのとき、私はある種の無力感にとらわれました。さまざまな活動を行い、ときには先鋭的な取り組みを通じて社会に働きかけてきましたが、目の前にいる友人の命を救うことはできなかった。世の中も変わるのではないかと思っていました。そんなに簡単に変わるものではありませんでした。そして、一つの理想を掲げて社会を変えようとする自体が、実は暴力なのではないかという感覚を覚えたのです。

そのとき、私の中で大きな方向転換が生まれました。それは、その時々、その理想を持ちながらも、その理想を社会に押し付けるのではなく、むしろ、そうした問題について語り続けることのできる空間や時間を創出していくことの方が大切なのではないか、という考え方です。そして、そのときから、共有空間を社会の中に実装することに取り組もうと考えるようになりました。

先ほどお話ししたウィークエンドカフェは、実は三年で終わることになります。その建物が歴史的建造物として保存されることになり、使えなくなったからです。そのため、そこに集っていた人々は困ることになりました。携帯電話がなかった時代ですから、メールアドレスや連絡先も交換していませんでした。しかも、その場所ではあだ名で呼び合っていたため、お互いの本名もほとんど知らなかったのです。ですから、その場所がなくなると、再び出会うことが難しくなってしまうのです。そうした状況に直面した人々が、新たな場所を探し始めました。

それが、同志社大学のすぐ近くにある一〇〇年以上の歴史を持つ牧師館でした。そこを改装して使わせていただけることになり、そこで生まれたのが日本でも初期のコミュニティカフェの一つです。私たちはそこを「バザールカフェ」と名付けました。さまざまな団体が運営に関わり、有給の枠では生活に困難を抱えている人々が働き、それ以外のスタッフは全員ボランティアとし

て関わる場所です。ウィークエンドカフェに続く二度目の取り組みだったので、今度は社会に開かれた、正式な認可を受けたカフェとして運営しました。もう二十八年ほど経ちますが、現在も京都の老舗カフェとして運営されています。もしよろしければ、「バザールカフェ」と検索してみてください。ここで飲食をしていただくと、その営みが直接誰かを支えることにつながる仕組みになっています。そうしたコミュニティカフェです。

屋台、小屋、そして「焚き火」——関係性を生み出す空間づくり

それ以来、共有空間を社会の中に実装するにはどうすればよいのかを、さまざまな形で考え続けてきました。その試みの一つとして、屋台を持ち込む活動も行っています。例えば、阪神・淡路大震災後の復興住宅周辺で行ったプロジェクトでは、アルコール依存の方が多く暮らす集落や復興住宅に屋台を持ち込み、交流会を企画しました。災害後に個別住居へ移ると、孤立の中でお酒を飲み続けてしまう方が少なくなかったのです。そこで、「せめて一緒に飲みませんか」という形で屋台を持ち込み、バーとして運営しました。バーのマスターとチーママには、シングルマ

ザー家庭などで親の帰宅が遅くなりがちな子どもたちにお願ひし、その役割を担ってもらいました。その子どもたちが「おっちゃん、おばちゃん、もうやめとき」と声をかけると、皆さん喜んで飲むのをやめるんですね（笑）。そうしたとても良い関係が生まれていたのですが、私は教育委員会からずいぶん叱られました。「お酒とお金を子どもに握らせてはいけない」ということで、この企画は三ヶ月で終了しました。しかし、屋台にはさまざまな効果があり、コミュニティへの入り口をつくる際に非常に有効なのです。

さらに、その屋台を少し大きくすると小屋になります。小屋もまたさまざまな活動の拠点となるため、非常に期待が高まる空間です。例えば、大学の構内で学生たちとともに小屋を制作し、東日本大震災のボランティアに参加する学生たちの活動拠点にしたこともありました。その小屋は、授業を行ったり、さまざまな計画を練ったりするための場所として活用されました。その後も、私たちは次々と小屋を制作していきました。本日は龍谷大学の関係者の皆様も多数お越しのため少々申し上げにくいのですが、当時は大学側から度々叱責を受け、時には衝突しながら活動を進めてまいりました。無許可で建てた小屋は、違法建築に該当してしまうからです。

そこで私たちは、これらは「作品」であるという立場をとりました。「あれは彫刻作品であり、建築物ではなく設置作品である」と説明を続けているうちに、いつの間にか大学のユニークな授業としてパンフレットに掲載されるようになりました。そのようにして既成事実が積み重なることで、次第に小屋の存在が認められていったのです。私はこれまで、共有空間のあり方についてさまざまな試みを行ってまいりましたが、その中で最も効果的であったのは、実は「焚き火」でした。考えてみると、共有空間というものは、太古の昔から人類が多様な形で築き上げてきたものです。したがって、食事や子どもの世話といった人間の原始的（プリミティブ）な営みは、共有空間と非常に高い親和性を持っています。そして、その中でも人類が最も長く付き合ってきた共有空間こそが、「焚き火の前」なのです。

人類は共同生活を営むようになって以来、常に火を手に入れ、その前で時間を過ごしてきたのだと思います。その意味で、私たちの中にはDNAに刻まれているようなある種の感覚が存在しており、焚き火の前になると、自己紹介をするまでもなく自然と穏やかに語り合い始めるといった現象が起こります。したがって、共有空間を構築する際の出発点として、「焚き火」は非常に有効な手段であると考えています。

東日本大震災の後、私たちは学生たちとともにさまざまな被災地に入りましたが、その際に訪れた場所の一つが、町の約八十％が津波の被害を受けた女川町でした。そして現地で地元の方々とお話した際、次のような出来事を伺いました。震災直後、避難所となった病院や小学校の跡地では、津波に襲われたその日の夜から火を起こし、「とにかく何でもいいから燃やせ」と声を掛け合って焚き火をしたそうです。すると、その焚き火の明かりは海に流された人々にまで届きました。丘で燃えているその火を見て励まされ、「翌朝の救助が来るまで耐え抜くことができた」という証言が数多くあったのです。

現地でのお話を伺って分かったことは、避難所における焚き火の周囲では、自然と役割分担が決まり、会議が行われ、子どもたちが遊び、食事ができる、という素晴らしい空間が形成されていたということです。しかし、仮設住宅が整備され「火気厳禁」というルールができると、途端にそのような交流が途絶えてしまったそうです。こうした実情をお聞きし、女川では「あの焚き火をもう一回やりたい」という思いから、プロジェクトを進めることになりました。

しかし、依然として火気厳禁という壁がありました。その状況を乗り越えるため、誠に恐縮ではありましたが、宗教的な意味合いをお借りすることにしました。地域に本来そうした風習はな

かったものの、「迎え火・送り火」という言葉を持ち込み、新たな行事として焚き火を行ったのです。迎え火として魂をお迎えし、ともに一時を過ごした後に再び送り出すという趣旨で、「女川常夜灯」というプロジェクトを開始しました。家が流されたそれぞれの跡地で、生き残ったご家族の方々に小さな焚き火をしていただき、およそ八十家族が参加されました。そこへ外部から訪れた人々も加わり、ともに焚き火を囲みながらさまざまなお話を伺う場となりました。高台から見下ろすと、焚き火の灯りによってかつての集落の形がうつすらと浮かび上がるような光景が広がっていました。このような活動を通じて、私は現在も焚き火を核とした教育空間の試みが続けています。

例えば、私たちの大学が現在の場所に移転するにあたって地元住民の方々との交流を図るため、こうした焚き火の場を三ヶ月間継続的に設けました。毎回さまざまな話を交わし、皆で楽しみながら未来について語り合う場といたしました。その後も、ロームシアターや他のさまざまな大学において、焚き火の場を開いています。

また、私が学長に就任してからのことですが、本学の学長室は実は一階にあります。設計を依

頼する際、大学移転のコンセプトに「価値を転換する」という言葉を記して設計者にお渡ししたところ、学長室が最も低い階に配置されたのです。ガラス張りの開かれた空間に学長室が設けられたため、これを「学長広場」と名付け、皆様に開放しております。昼休みには学生たちがお弁当を持ち込み、一緒に食事をしています。外部の方々も自由に出入りできますし、私の蔵書も返却期限を設けずに貸し出しています。このような形態をとることで、自然とさまざまな会話が生まれやすくなりました。もともと少人数教育の大学でもあるため、学生と教職員が互いに顔の見える関係を築いており、こうした場所を有効に活用しています。

ただし、大学のキャンパスを移転してからは、さまざまな生き物の姿が見られなくなっていました。緑も少なくなり、かつては野良犬や野良猫が出入りし、猿まで姿を見せていたのですが、現在では生き物の気配をほとんど感じなくなってしまうたのです。そこで、この新しい空間に生物を交えた環境を何とか作り出したいと考え、「犬場^{いぬば}」というものを設けています。「焚き火場」が火を囲むだけの場であるのに対し、この「犬場」は犬がいるだけの場です。

実は以前、自身の飼犬を大学に連れてきたことがありました。その際、事務局から「無断で連れてきてはいけない」と厳しく叱責を受けたのです。それが少々悔しかったこともあり、いつ

そのことプロジェクトにしてしまおうと考えました。教職員や学生の中で犬を飼っている方、あるいは近所で犬の散歩をしている方々にお声がけをして、定期的に「犬場」を開催しています。毎回十匹から十五匹ほどの犬が遊びに来てくれ、学生たちも自然と集まって犬たちをたくさん撫でてくれます。そして、犬を撫でながらさまざまな会話が交わされます。私自身、このような場をつくることの面白さを実感しながら、現在も活動を続けております。

芸術の価値と大学の使命 ——「未来の当たり前」を創造する

ここからは、芸術と龍谷大学の皆様が実践されている教育との間に、どのような共通点があるのかについてお話しさせていただきます。「芸術（藝術）」という文字に含まれる旧字の「藝」という漢字には、修練や鍛錬によって身につけたものを生かすという意味とともに、草木を植え、種をまき、育てるという意味も込められています。したがって、芸術というものは、植物の成長と非常に高い親和性を持っているのです。

京都市立芸術大学では「未来の当たり前を創造する」、および「わからなさ」と友達になる大

学」という二つの理念を掲げています。このうち「未来の当たり前を創造する」ということは、芸術の価値を考えるうえで非常に重要な視点です。芸術の価値とは、現在の価値観や思考のあり方に違和感を覚えた者が、既存のものとは異なる価値観や、未来において当たり前となるであろう新たな試みを、手探りで表現し始めることにあります。ですから、その時点で提示されたものが難解であったり、分かりにくかったりするものは、ある意味で当然のことなのです。

芸術にはさまざまな表現の種類があります。現在、あるいは一年から五年ほど先の近い未来において必要とされる感覚に応える表現が存在します。それはデザインや工芸、あるいは音楽もその一例と言えるかもしれません。現在の価値観に応えるという意味において、これらは「クライアントが存在する表現」とも言えます。必ずしも具体的な顔が見えるわけではありませんが、現在の価値観によって期待されることに応えなければなりません。そうした営みもまた重要な学びの一つです。

しかし、芸術にはそれ以外にも多様な表現が存在します。例えば、十年から三十年、あるいはそれ以上の長い時間をかけて社会に浸透していく表現です。これらが登場した当初は、社会にな

かなか受け入れられにくい感覚です。しかし、十年、二十年、三十年と経つうちに、その感覚は当たり前なものとなっていきます。その頃には、誰が創り出したのかさえ意識されないほど、社会の価値観として定着するものが生まれることもあります。現在私たちが身につけている洋服などもその一例です。どこかの誰かが発明したものが気づけば当たり前存在になっているのです。場合によっては定着するまでに一〇〇年以上かかるものもあります。現在私たちが享受しているダイバーシティやジェンダーという世界観、あるいはセクシュアリティの多様性といった概念は未だ完全に当たり前になったとは言えないものの、多くの人々に認知されるようになるまでに膨大な時間を要しています。もちろん、もっと早い段階でその重要性に気づいていた人も多数存在したはずですが、しかし、それが社会に定着するまでには、本当に長い時間がかかるのです。

私たちの大学は、まさにそうした気の遠くなるような時間を要する事象を扱っているという認識を持っています。したがって、学生たちが卒業する際には、「非常に長い問いの世界へ向かう飛び込み台に、ようやく立ったのだ」という自覚を持ってもらうようにしています。

大学で学ぶべきこととは何かと申しますと、そうした社会の荒波を泳ぎ切るための体力や思考力、危機管理能力であり、さらには他者を支えるための技術です。学生たちにはこれらを身につ

けたうえで、大海へと泳ぎ出してもらうのです。「未来の当たり前をつくるには時間がかかる」、これこそが私たちの大学の根底にある理念でもあります。

現在の社会は非常に慌ただしく動いています。この目まぐるしい世の中において、私たちは多様な役割を求められます。経済効果や癒し、教育効果といったさまざまな課題の解決を期待され、時にはプロパガンダとして利用されることすらあります。地域の活性化やコミュニティの再生といったテーマは、芸術の世界にとどまらず学問の世界全体が社会から求められている役割でしょう。

確かに社会が納得できるスピード感で取り組まなければならない課題も存在します。しかし、多くの場合、私たちはこの経済社会のリズムに合わせて無理に急がされているように感じられます。資本主義、あるいは新自由主義と呼ばれる経済の潮流の中で、誰にも止められないほどの速さで物事を回転させなければならない時代に巻き込まれている気がしてなりません。

私たちのような芸術系の大学でさえ、文部科学省など国からの圧力を感じることがあります。世の中ですぐに役に立つ実利的なものに力点を置くべきだ、というのが現在の大きな流れなので

しょう。しかし、そうした潮流と対極にあるのが芸術の道です。非常に時間のかかる営みに取り組んでいるという事実を何とか社会に訴えかけ、支援を求め、あるいは社会実装していく必要があると考えています。

芸術とは、社会に対して疑問を投げかけ、その価値を問うものです。時には社会に対して毒を吐くような役割も担います。社会が発展するためには、まずこうした疑義を呈することが不可欠なのです。本学は、京都市民の皆様の税金によって設置されている大学です。公の財源でこのような場が設けられている意味を考えたととき、実は「社会に対してしっかりと疑義を述べる機関」を市民の皆様自らが設置してくださったと考えるべきではないでしょうか。その期待に応えていくことこそが、私たちの義務でもあります。

そこで学ぶべきことは、先ほど申し上げたような長い時間をかけて取り組むための「生きるための技術」です。これこそが、いわゆるリベラルアーツと呼ばれるものだとは私と考えています。同時に、芸術の道や学問全般に通じることですが、探究を進めれば進めるほど新たな未知の世界が見えてくる、という過程を繰り返すことになるのです。「ゴールが存在しない」という感覚については、皆様にも共感していただけるのではないのでしょうか。

芸術の探究は、未来の世界と向き合うことから始まります。理解できる世界、理解し合える仲間、あるいは既知の知識のみで物事を構築しようとする、取り返しのつかない過ちを犯す恐れがあります。これは、すべての学問において言えることでしょう。一つ理解できたと思った瞬間にまた違う世界が見え始め、新たな未知と対峙する。こうした過程を繰り返していくためには、本当に体力が必要です。肉体的な体力はもちろんのこと、精神的に耐えうる強靱な体力も不可欠となります。

「わからなさ」と友達になる」——一〇〇年の森プロジェクトと未来への責任

そうした未知のものと向き合う方法論は、人類が太古の昔からさまざまな学問や技術において実践し、繰り返してきた歴史があります。その過程で、多様な知見やノウハウが培われてきたはずです。特に芸術は探求の世界でもありますから、そうした「わからなさ」と付き合う方法論が先人たちによって数多く編み出されてきました。

本学は一五〇年の歴史がある大学であり、芸術系の大学としては国内で最も古い歴史を持って

います。その一五〇年の歩みを振り返りますと、先人たちが多大な努力の中で絶えず思考を深めてきた足跡が、数多く残されています。そうした歴史を背景に、私たちはこれからの社会や未来に向けて、同じように探求を続けていかなければなりません。その際、「わからなさ」をどのよう扱うかが、非常に重要となります。

先人たちの姿勢を見ますと、彼らはどうやらその「わからなさ」と楽しそうに付き合っているように見受けられます。それを表現したのが「友達になる」という曖昧な言葉なのです。「友達になる」ことには明確な方法論が存在しません。しかし、この「友達になる」という振る舞いや思考のあり方を通じて、多様なものが発明されていくのではないかと考えています。したがって、本学では「わからなさ」と友達になるノウハウを皆で真摯に考え、意見を交わしながら、社会や世界の捉え方を編み出すことが私たちの理念となっているのです。

そうした中で、近年、本学の周辺はさまざまな再開発の波に揉まれています。この場所は平安時代から続く、さまざまな謂れいを持つ土地です。かつて被差別部落として差別の対象となってきた地域でもあります。また、線路の南側は在日朝鮮人の方々が戦後のさまざまな政策によって置き去りにされていく中で切り拓いた場所でもあります。現在、そうした歴史を持つ場所が「経済

的一等地」であるという視線に晒され、さまざまな開発が進められつつあります。

ジェントリフィケーションという言葉があるように、さまざまな開発や発展というものは、過去の歴史を消し去りながら進んでいく可能性があります。そのような開発において、いわゆる「負の遺産」は妨げとして扱われがちです。そうした歴史を上書きしていくような開発の一端を本学も担うことになるのか、それともこの地に移転したことを機に再開発に対する歯止めとしての役割を果たすのか。私たちは今、まさにその姿勢を問われている瞬間でもあります。

本学は現在、崇仁地区という地域に位置しております。ここは住宅改良事業という名のもとに古い家屋の並んでいた場所に市営住宅が建設され、住民の方々が移住を迫られている地域です。大学の目の前には、フェンスで囲まれた空き地が一面に広がっています。あと二年ほどはこの改良事業が進められるとのことですが、それが終了したあかつきには一挙に開発の波が押し寄せてくることが予想されます。経済的な利便性などを考慮すると、ビジネス向けのオフィスビルや高級マンション、場合によってはタワーマンションのような建物が将来的に建つ可能性のある地域なのです。

そのような開発の流れを何としても異なる価値観によって変えていきたいと私は考え、「一〇〇年の森プロジェクト」というものを立ち上げました。これは、地元の方々とお話する中で伺ったことなのですが、住環境がどれほど向上しても「何かが欠けている」という感覚を抱いておられるとのことでした。その欠けているものとは、かつて存在した豊かな緑や、作物を育てていた場所、そうした空間で子どもたちが遊び、交流が生まれていた情景、さらには銭湯が地域社会をつなぐ結節点であったことなどです。そうしたお話を伺うにつれ、これらの環境を再び取り戻すことこそが、実は新たな豊かさの指標になるのではないかという思いを強く抱くようになりました。そこで、無理を承知のうえで、目の前に広がる京都駅すぐ東側の一等地に、一〇〇年先、さらには一〇〇〇年先まで続く「森」を創出できないかと提案いたしました。現在では、多様な勉強会が開催されるなど具体的な動きが生まれており、京都市へ提言を行う段階にまで進んでいます。

この構想が実現することを願い、現在さまざまな働きかけを行っております。これは共有空間を創出する際の概念と重なる部分もあるのですが、私たちの活動の指針とするため、自らを律する「三原則」を設けました。

一つ目は、「生物圏への参加」です。これは人間中心主義的な開発ではありません。自然というものは、人間の手を離れても自ら形成されていくものです。そして、その中で自然な循環が生まれます。こうした生物圏における循環の中に、人間の側が改めて参加させていただくという感覚を持てるかどうか、このプロジェクトの要となります。その理念から逸脱するような計画は立てないという、自らへの戒めでもあります。

二つ目は、「地区の住民の歴史を第一とする」ことです。これは、その土地が持つ歴史や刻まれた時間を深く学び、尊重しながら、地域の方々と共に開発のあり方を創り上げていけるかどうか問われる原則です。

三つ目は、「多世代のための受託管理としての思考」です。受託管理と申しますと少し硬い言葉に聞こえるかもしれませんが、この世界は当座、私たちが一時的に預かっているに過ぎず、本来は未来の世代へ託すべきものである、という感覚を常に持つということです。したがって、現在の私たちが資源を使い尽くしたり、環境を汚染し破壊してしまったらすれば、未来へ引き継ぐべきものが失われてしまうはずです。つまり、現世というものを未来から「受託している」という感覚を忘れず、多様な物事を検討していけるかどうか私たちに課せられた大きな責任である

と言えます。

近年、ローマン・クルツナリックという思想家が『グッド・アンセスター』という著書を出版し、「私たちは良き祖先になれるのか」という問いを投げかけました。その著書が示すように、まさに今、私たちは極めて大きな問いを突きつけられていると感じています。放置すれば地球の資源を食い尽くし、紛争の末に奪い合いを繰り返していると感じています。未来の世代へ引き渡すべき社会そのものを失ってしまいかねない世界を私たちは生きています。そうした現状から脱却し、新たな思考へと転換することが何より必要不可欠であると、私たちは考えております。

滔々^{とうとう}と語ってまいりましたが、「わからなさ^{とうとう}と友達になる」という感覚はすべての学びの場に共通する重要な姿勢であり、考え方であると確信しております。社会の根幹がそのような姿勢で支えられるようになれば、広い寛容性を持ち互いの違いを認め合えるような社会がようやく実現できるのではないかと夢見ております。

本日は誠にありがとうございました。

【文責宗教部】

（二〇二六年五月二十一日 創立記念・親鸞聖人降誕会法要 瀬田学舎）

〈弱いロボット〉から考える 人・社会・生きること

岡田 美智男

（筑紫女学園大学 副学長・教授）



岡田 美智男 (おかだ みちお)

1960年、福島県出身。

東北大学大学院工学研究科情報工学専攻博士後期課程修了、工学博士。NTT基礎研究所情報科学研究部研究員、国際電気通信基礎技術研究所（ATR）主任研究員、豊橋技術科学大学情報・知能工学系教授などを歴任。

現在、筑紫女学園大学副学長・現代社会学部教授。豊橋技術科学大学名誉教授。

【著作】

『〈弱いロボット〉から考える 人・社会・生きること』（岩波書店／2024）

『ロボット 共生に向けたインタラクション』（東京大学出版会／2020）

『〈弱いロボット〉の思考 わたし・身体・コミュニケーション』

（講談社現代新書／2017）

『弱いロボット』（医学書院／2012）

ほか多数。

はじめに

ただいまご紹介いただきました、筑紫女学園大学の岡田美智男と申します。本日は創立記念、ならびに降誕会法要という大切な場にお招きいただき、誠にありがとうございます。本日は、私どもがこれまで議論してきた『弱いロボット』についてご紹介したいと思います。

まず、簡単な自己紹介となりますが、私はもともとNTTの研究所で研究員を務めておりました。その後、関西のけいはんな学研都市にあるATRという研究所に十一年ほど勤務し、豊橋技術科学大学へと移りました。昨年度からは、福岡の太宰府市にある筑紫女学園大学に勤務しております。この筑紫女学園大学は、龍谷総合学園の一つに位置づけられています、この度のご縁につながりました。私は『弱いロボット』をテーマに、ここ十五年ほどは書籍を執筆したり、最近では子供向けの絵本を制作しています。本日はその『弱いロボット』についてお話していこうと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

自分の顔は見えない？——二つの身体に対する視点と「対人的な自己」

実際にこの場に立って話を始めますと、いつもそうなのですが、とても緊張してしまいます。しかし、この緊張感もなかなか良いものです。教員を長く務めておりますので、次第にこうしたドキドキ感は薄れてきてはいるものの、やはりここに立つたびにドキドキしてしまいます。

なぜドキドキするのか、その理由について少し考えてみるのも面白いかと思っています。皆様から私の姿がどのように見えるかといいますと、中年を過ぎた男性が一人立って、ボソボソと話をしているように見えるかと思います。では反対に、私から皆様の姿がどのように見えるかといいますと、大勢の方々の顔がずらりと並んでおり、こちらに注意を向けてくださっているように見えます。しかし、これだけ大勢の方々がいらっしやるにも関わらず、この中に「自分の顔はない」「自分の顔が見えない」という、非常に面白い非対称性があることに気づきます。この中に自分の顔がないというのは、とても所在ない感じがいたします。それでも、なんとか話を進めていく中で、次第に自分の姿が見えてくるといふ側面はあるかと思っています。

私の中学校、高校の頃を思い浮かべても、やっぱりこの話し方でも分かると思いますが、な

なんかどこかおどおどしたり、もじもじしたり、それからドキドキしたりっていう、そんな何をしてもしてもなにかぎこちない感じっていうのがありましたね。今の言葉で言うところ「コミュ障」のようなものなのですが、最初は自分が小心者なのかなと思っていたところがあるんです。そのことで、ずっと思い悩んでいたんですけども、三十歳を超えたあたりにちょっと面白い絵というか、不思議な自画像に出会いました。

それは物理学者・哲学者として知られるエルンスト・マッハという人物の「左目から見た自画像」という絵です。この絵を目にした時に「あれ？ どうしたの？ この絵は」というふうに、ちょっと驚いたんですよ。これはエルンスト・マッハさんの左目から見た彼の自画像を一生懸命描いたものなんだそうです。どこかで見かけたことがあるかもしれませんが。知覚心理学とか現象学なんかでよく出てくる絵です。これを見たときに、自分の内側からは自分の顔は見えないことに気づき、改めてこういう発見って面白いなと思いました。

私たちの身体を捉えるときには、二つの視点があると考えられます。一つは「観察者から見た身体」です。これは、私が皆様の姿を見ている時のように、観察者から見た身体にはどこも欠けたところがないという特徴があります。花園大学や奈良女子大学にいらっしゃった浜田寿美男先

生は、「私たちの身体は外から容易に観察できるため、個として完結しているという先入観を持たれやすい」とおっしゃっていました。

一方、先ほどのマッハの絵は、「行為者の内側から見た身体」を示しています。自分の内側の視点から自分の身体がどう見えるのかを丁寧に観察してみると、意外にも足元や手元くらいしか見えず、ここに顔があるはずなのに自分の顔は見えません。このように、自分の身体であるにも関わらず、内側からは自分の顔が見えないというのは、とても大きな発見だと感じました。そういう意味で、私たちの身体とは本来不完結なものであり、外に向かって開かれているものなのだと考えられます。

中学や高校時代に感じていた、いわゆる「コミュニケーション」をはじめとする自分のコンプレックスの正体は何であったのか。それは、「他者の身体は外から見ると完全無欠に見えるのに対し、自分の身体を見るとどこか不完全に見える」という点にあります。この非対称な関係こそがコンプレックスの正体だったのだと、三十歳を過ぎたあたりから次第に分かってきました。

私たちは皆様も含め、このような不完全で不完結な身体を抱えています。日常生活の中で周囲と関わろうとする際にも、自分の顔は見えないという不思議な身体を抱えながら生活しているの

です。しかし、それによって困ることは全くありません。その理由は、例えば周囲の景色を見ながら一歩前に踏み出してみると、それだけで風景がわずかに変化するからです。ここでも自分の身体や顔は見えていませんが、動き出してみると、自分が今どちらの方向に向かつて、どれほどの速度で歩いているのかが自然と見えてきます。これが、生態心理学において「生態学的な自己」と呼ばれているものです。皆様もこの環境の中で顔を上下左右に少し動かしてみるだけで、今自分がどちらの方向を向き、何をしているのかという自身の姿が、自ずと捉えられるのではないのでしょうか。

現在、皆様の姿やお顔を拝見しておりますが、これだけ大勢の方がいらっしゃるにも関わらず、自分の顔は見えません。しかし、私の発話に合わせた皆様の表情の変化の中に、私という存在が次第に立ち現れてくるような感覚を覚えます。このように、目の前の相手の中に自分の表情が映し込まれている状態を、生態心理学では「社会的な自己」あるいは「対人的な自己」と呼んでいます。つまり、私たちは不完全な身体を抱えつつも、一歩踏み出すことで自らの姿が見えてきたり、こうして言葉を発した時の皆様の表情の変化から、自分が今どのような状況で何を話しているのかという「私」が立ち現れてきたりするのだと考えられます。

他者の姿を観察者の視点から見ると、何も欠けたところがない完全無欠な存在に見えるため、「自分もそうであらねばならない」と思い込んでしまいがちです。子育ての場面においても、一生懸命に靴下を履こうとする子どもに対して「早く一人で履けるようにならなくてはね」と期待をかける親と、それに応えて「もう一人でできるよ」と誇らしげに言葉にする子どもの姿が見られます。あるいは、学生の皆様であれば定期試験を思い浮かべてみてください。テストは一人で受けるものであり、誰の力も借りてはならないとされています。「このくらいの問題であれば一人で解けるだろうか」と、常に個人の完結した力が問われているように感じるのではないでしようか。

「二人でできるもん」の呪縛と、新しい「自立論」

ロボットを作るときにもやはり、「誰かの手を借りていては自立したロボットとは言えない」と考え、人の手を借りずに自律的に動けるロボットを一生懸命作ってきたという背景があります。高齢の方々も「まだまだ若い人の世話にはなりませんよ」と頑張って生きておられます。このよ

うに考えてみますと、私たちはこれまで「一人でできることを善しとする」文化の中で育ってきたのではないでしょうか。観察者の視点から見ると他人の姿は完全無欠に見えるため、自分も完全でなければならぬと思ひ込んでしまっているのだと思います。ところが、先ほどの子どもが一生懸命に靴下を履いている姿をもう少し丁寧に観察してみるとどうでしょうか。「早く一人で履けるようにならなくてはね」という親の期待のもと「もう一人でできるよ」と得意がっていますが、よく見ると一人で履いているように見えても座面の広い椅子に座り、背中を壁に押し当てて身体バランスをとりながら靴下を履いているのです。

これまで「自立する」というのは、誰の助けも借りずに一人でできること、という観点から捉えられてきましたが、こうした姿を見てみますと、もう一つの自立論が言えるのではないかと思います。熊谷晋一朗さんがおっしゃっていた「依存先の分散としての自立」という考え方があります。自立するというのは、実は誰の助けも借りずに一人で完結することではなく、むしろ依存先を様々なところに分散させておき、それらに頼りながら身体を支えてもらって靴下を履くということなのです。「自立のポイントは、むしろ依存先を増やしておくこと、それを分散させておくことである」と熊谷さんは語っておられました。こうした視点は非常に興味深いものです。こ

れまで私たちは「個体能力主義」と呼ばれる考え方にとらわれすぎていたのではないのでしょうか。「周囲の手を借りてもよいのだ」と、もっと柔軟に考えてもよいのではないかと思います。

このような感覚を私は生態心理学という分野から学んできました。私たちの身体というものは不完結なものであり、外に向かつて開かれています。私たちを取り囲む環境と（ひとつのシステム）を構築しながら、結果として価値ある事態を生み出しているのではないかと考えられます。様々な表現がありますが、私たちはこのような関係の網目の中に埋め込まれていると捉えてもよいでしょうし、状況の中に埋め込まれていると表現される場合もあります。「弱いロボット」とはどのようなロボットなのか。それはまさに、この二つの考え方の違いにあると言えます。ソーシャルなロボットを開発する際にも、二つのアプローチが存在します。

一つ目は、先ほどの「観察者の視点」から見た身体のアナロジーで考える「個体能力主義的なアプローチ」です。これは、どこまでも自己完結や完全無欠を目指し、足りない機能を次々と追加していくというものです。このような「足し算型」のデザインによってロボットを開発していくという考え方です。

もう一つは、「関係論的なアプローチ」と呼ばれるものです。私たちの身体はそもそも不完全、

あるいは不完結なものであるならば、いつそ周囲に半ば委ねてしまつてはどうかという考え方です。そのような環境の中でお互いに緩やかに支え合う、関係論的な存在としてロボットを作れるのではないか。こうした流れの中にあるものを、私たちは『弱いロボット』と呼んできました。

しかし、これを実際に作ろうとすると非常に難しく、たびたび壁にぶつかつて（または「つまづいて」）しまいます。「行為者の内なる視点から見た身体」というものを作れないだろうか、様々な挑戦を重ねてまいりました。二〇〇〇年からの取り組みですので、もう二十六年ほど前からのことになりますが、先ほどのマッハの絵などを参考に、こうした身体観を持ったロボットを作ろうと考えたのです。行為者の内なる視点を持たせるために目玉を一つ付け、知覚や行為を生み出すためのアクチュエータを内部に少し組み込み、そして存在を示すためのごくシンプルなボディを作りました。あとは生態学的、あるいは社会的な調整機構が備われば、関係論的な存在としてのロボットが作れるのではないかと考えたのですが、これがなかなか困難でした。というのも、関係の網目を数値化し、実際に形にすることには大きな難しさが伴うからです。それでも、試行錯誤を繰り返しながら今日まで取り組みを続けてまいりました。

「へこみ」は「関わりしろ」——弱さが引き出す優しさとウェルビーイング

そうして実験を進めると、さまざまな非常に面白い発見がありました。たとえば、手足もなく何もできない「むゝ（Mu-）」というロボットの実験では、人間との間に新たな関わりを生み出すことが分かりました（図1）。それはまるで、赤ちゃんに対するような関わりと言えるかもしれません。子どもたちのところに持って行けば、学習環境として使えるのではないかと考え、実際に持って行ったのですが、あまりの拙さにしびれを切らした子どもたちが自らロボットの世話を始めました。

初めは子どもたちにもみくちやにされてしまうのですが、「むゝ」の拙さにしびれを切らした子どもたちが反対に「むゝ」の世話を始めたという光景を目にして、弱さには積極的な意味があるのかもしれないと思いました。当時、鷲田清一先生の『弱さのちから』（講談社、二〇〇一年）という本が講談社から出版されており、「弱さ」という



（図1）

(図 2)



概念は面白いのではないかと感じ始めた頃です。今から二十五年ほど前のことになります。

その後もさまざまな試みを行ってまいりましたが、もう少し分かりやすいものを作ろうと考え、学生たちと自らの手ではゴミを拾えないのですが、周りの人たちの手助けを上手に引き出しながらゴミを拾い集めてしまうロボットを作ってみました。ランドリーバスケットを手に入れ、それを動かしてストップモーションムービーを作って遊んでいたことから生まれたのですが、実際の様子は次のようなものです(図2)。

ヨタヨタとペットボトルに近づくのですが、自分では拾えないため、人の方へ少しすり寄っていき、頭をべこりと下げます。すると、人はなんとなく「拾ってあげなければ」という感覚になり、ゴミを拾って中に入れてあげると、ロボットがまたお辞儀をしてくれるという、ただそれだけの仕組みです。これまで私たちは、ロボットの性能や機能というものを、ロボット単体の枠組みの中で考えてきたかと思います。その範囲の中で捉えようと、この

ロボットはただヨタヨタしているだけに過ぎません。しかし、分析の単位を周囲の環境にまで広げてみますと、このロボットは人との関係性の中で結果としてゴミを拾い集めることができ、かつ手伝ってあげた人もなんとなく嬉しい気持ちになるという状況を生み出します。この関係性が非常に面白いと感じたのです。

このロボットを子どもたちがいる場所に連れて行きますと、さまざまな発見があり、非常に興味深い結果が得られました。

（動画内ナレーション）

「子どもたちが集まる場所においてどういう反応を示すか調べてみました。遠くから様子を眺める子や、覗き込んだりして観察する子、触ったり叩いたりして遊ぶ子など、その反応は様々です。しかし実験が進むと、やがてゴミを捨ててくれる子も現れました。子どもたちを味方に引き込んでゴミを集めるというゴミ箱ロボットの能力が、ここでも十分に発揮されたのです」

このようにヨタヨタと動いているだけなのですが、それを見た子どもたちが周りからゴミを

拾ってきてくれて、いつの間にかゴミ箱の中いっぱいになります。ただそれだけの話ではあるのですが、当初私たちは他者の手助けを上手に引き出して目的を叶えるという、社会的スキルを持ったロボットとして着目していました。しかし、こうしてさまざまな実験を進めてみますと、手伝ってくれる子どもたちの表情が実に素晴らしいことに気がつきました。とても生き生きとしているのです。結果として、このロボットのポンコツさ、いわば「へこみ（弱さ）」が、周りの子どもたちの工夫や優しさを引き出してくれます。手伝った側も決して悪い気はしないため、子どもたち自身も自らの能力が十分に活かされ、生き生きと幸せそうな顔をしています。最近ではこうした状態を「ウェルビーイング」と呼びますが、このような関係性の中で子どもたちのウェルビーイングが向上するという事実を、非常に面白く感じました。

さらに、三台ほどのロボットを同時に動かしておいたところ、幼稚園の年長くらいの子どもたちが、ロボットへ無造作にゴミが捨てられるのをかわいそうに思い、「これはペットボトル専用だよ」「これは燃えるゴミ専用だよ」と自主的にゴミの分別を始める姿も見られました。このように、ロボットの不完全さが子どもたちの工夫を引き出すという出来事があったのです。

これまで「一人でできる」と強がるようなロボットの技術開発に携わってきた研究者や技術者

の方々は「このロボットはこんなことも、あんなこともできる」と技術をアピールすることに一生懸命になりがちでした。そのため、「実はこのようなところがまだ苦手である」という不完全な部分は隠してしまいがちだったように思います。しかし、実際にはロボットといえども不完全なところがあります。その不完全さを隠さずにさらけ出し、周囲にそっと委ねてみると、そこが人間の活躍する場所になります。周囲の人は思わず手助けをしてしまい、手助けをした側も決して悪い気はしません。ロボットとしても、人間の手を借りることで、意外と簡単に目的を達成できてしまうことも少なくないのです。

そうすることで、人間の強みや優しさが引き出され、お互いの間に新たな関わりが生まれます。人間は人間で夕方になればお腹が空いたり眠くなったり、人間ならではの「へこみ」を持っていますが、そうした部分はロボットにサポートしてもらえばよいのです。これまで「へこみ」は隠すべきものとされてきましたが、むしろさらけ出すことによってお互いの関わりを引き出すための『関わりしろ』になることが分かってきました。お互いの弱いところを補い合いながら、強いところを引き出し合うという関係性です。

この〈むく〉やゴミ箱ロボットから始まった研究が十年、二十年と経つにつれて、さまざまな

種類のロボットが開発されてきました。他者の手助けを上手に引き出しながら目的とする行為を組織する。このような「関係論的な行為方略」を備えたロボットのことを、私たちは『弱いロボット』と呼ぶようになりました。手伝った側も悪い気はせず、自らの能力が活かされて生き生きとした幸せな状態を生み出す、そのような関係性を構築するロボットなのです。

ほかにも事例をいくつか紹介したいと思いますが、こちらは街角に立ってティッシュを配ろうとするロボットです。ティッシュを配るというのは非常に簡単なタスクではあるのですが、目の前を通り過ぎる人は見知らぬ他者であり、手渡す側も得体の知れないロボットです。両者が互いに心を合わせてティッシュを受け渡しするのはなかなか難しいものです。

ロボットがティッシュを手渡そうとしても人の動きは意外と素早いので、なかなか手渡すことができません。そのため、手を一度引っ込めてまたチャレンジするのですが、そうした振る舞いが少しもじもじしているように見え、「ティッシュを手渡したいのかな」と誰かが立ち止まってくれます。その結果、ロボットがティッシュを差し出すというよりは、人間に上手に受け取ってもらうことになります。このように、少しポンコツなところのあるロボットが、周囲の人の協力をうまく引き出し、結果として目的を達成してしまうのです。手伝った側もなんとなく「今日は

いいことをしたぞ」という温かい気持ちでその場を離れていく、そのような関係性が築かれます。

このように、いくら手渡そうとしても相手が受け取ってくれなければ行為として成立しないという意味で、私たちの行為にはさまざまなところに脆弱性や不完結な部分が潜んでいます。そうした部分を隠さずにさらけ出してみること、周囲がうまくフォローしてくれるという関係性が生まれるのではないだろうか。

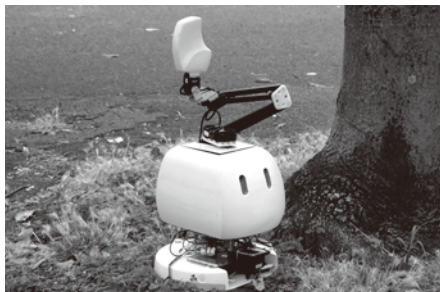
あるいは、こちらはようやく立ち上がって歩き出したばかりのような、おぼつかない姿をしたロボットです。特に何かの役に立つわけではないのですが、このようなロボットも開発しています。

（動画内ナレーション）

「例えばこれは、ようやく立ち上がったばかりの幼児のように、ふらふらとおぼつかない振る舞いをするロボット。近くにいたり何か頼られているような気がして、思わず手を差し伸べたくなる。そして、いないとなんとなく寂しい。そんな共存感覚を生み出すロボットです」

このロボットは、所在なさそうにふらふらと動いているだけです。少し近寄ってくる様子に私

(図 3)



私たちは「頼られているのではないか」と感じさせられます。しかし、いざこのロボットがいなくなってしまうと、私たちはある種の喪失感を覚えるのです。つまり、私たちはロボットを「支えている」つもりでいながら、実は「そのロボットを支えることができる存在」として、この関係性の中で自分たちの存在価値を自ずと与えられている、価値づけられていると言えます。相手を支えつつ、同時に自分も支えられるという、双方の関係性が構築されていたのだと気づかされます。

また、病院の中などで人間と手をつないで歩く、ただそれだけのロボットも開発しています(図3)。目的地まで正確に案内するような高機能なロボットでもよいのですが、このロボットはあえて少し頼りないところを特徴としています。

(動画内ナレーション)

「こちらは手をつないで人と並んで歩くという、ただそれだけのロボット。並んで歩き続けているうちにお互いの気持ちを通じ合っ

てくるように感じる、そんな並ぶ関係のコミュニケーションを狙って開発されたロボットです」

このロボットは、手をつないで案内してくれる便利な機能を備えているように見えて、実は少し頼りないのです。しかし、ロボットが頼りないと人間の側が「どうしたの？ どちらの方向に行きたいの？」と思わず相手を慮ってしまう傾向があります。一方で、ロボットの側も人間の歩く方向やスピードを手がかりに、「この人は今、どちらの方向へ、どれくらいのスピードで動きたいのだろうか」とわずかながら慮るようになります。このように双方が互いを慮ることで、心理学で「自他非分離」あるいは「ウィーモード (We-mode)」と呼ばれる状態が生まれます。単なる「私とあなた」という対立的な関係ではなく、「私たち」として一体となって歩くスタイルが構築されるため、まるで阿吽の呼吸で気持ちを通じ合うかのような感覚をもたらすロボットなのです。

「相手のため」が主体性を奪う？

私たちが開発しているロボットは、このように少し頼りなかったり、もじもじしていたりと、それぞれに不完全な特徴を持っています。「もっと積極的に手を引いて案内すればよいのではないか」と思われるかもしれませんが、実はそれも一考の余地があります。ここで、「コンヴィヴィアリティ（Conviviality ≡ 自立共生）」という概念について考えてみたいと思います。

これはブラインドマラソン（視覚障害者マラソン）のエピソードからヒントを得たものです。ブラインドマラソンでは、視覚障害のあるランナーの隣に伴走者が寄り添って走ります。その際、手を強く握りしめて安全に先導すれば、確かにランナーは安心して走れるかもしれませんが。しかし、手を強く握りすぎると、ランナー自身が今まで培ってきた身体感覚や勘を活かすことができなくなってしまいます。「このカーブであれば、これくらいのスピードで走るのがちょうどよい」といった自発的な感覚が機能しなくなり、結果として「連れ歩かれている」状態になってしまうのです。こうした視点から考えると、「相手のために」という良意がかえって相手の主体性や創造性を奪ってしまうという側面があることに気づかされます。実はブラインドマラソンでは、

「きずな」と呼ばれる伴走ロープが使われており、その手と手の間にはあえて「たるみ」が持たせられています。この伴走ロープは、相手を無理に引っ張るためのものではなく、お互いの存在をかすかに感じ取るためのものです。互いの自立性や主体性を尊重しながら、必要な瞬間にだけ支え合う関係性を構築できる点が重要です。このような関係性こそが、まさに「自立共生的なコンヴィヴィアリティ」と呼ぶにふさわしいのではないかと考えています。

これまで技術者の方々は、「利便性」が人々の幸せにつながるのではないかと信じ、一生懸命に研究開発に取り組んできました。しかし先述の通り、「相手のために」という思いがかえって相手の主体性や創造性を奪ってしまうことがあります。便利すぎる生活も快適ではありませんが、なんだか自分が生き生きとしている実感が持てない。そのような感覚に陥ることがあるのではないのでしょうか。それでは何が必要かと言いますと、お互いの主体性や創造性を奪わない程度に「緩やかに依存し合う関係」が重要になってくるのです。

コンヴィヴィアリティという言葉は「自立共生的な」あるいは「共倫的な」と訳されますが、要するに「ともに生き生きと生きる」ということです。この概念を、人とロボット、あるいは人と人との関係性にも活かすことができれば非常に面白いと考えられます。私たちは、この考え方

をロボットとの相互作用の場面に展開し、様々な議論を重ねてまいりました。例えば、記号学者のミハイル・バフチンは「不完結な言葉は内的説得力を持つ」と述べています。自己完結した言葉というものは、自らの中で意味を完結させようとするため調整の余地がなく、相手にきつい印象を与えてしまいます。ロボットから「そのゴミを拾って」と直接的に言われるとなんとなくカチンとくるものですが、このように権威的な言葉になってしまうのはあまり望ましくありません。むしろ、半ば聞き手に委ねながら一緒に意味を生み出すような「不完結な言葉」の方が他者と調整する余地が生まれ、聞き手の参加を引き出すことができます。その結果、双方が納得感や説得力を見出す「内的説得力を持つ言葉」になり得るのです。言葉のやり取りにおいても、自己完結を目指すよりは、むしろ不完結である方が豊かな意味を持つのではないか、ということです。例えば、「言葉足らずな発話」を例に挙げてみましょう。小学生の子どもが、今日あった出来事をお母さんに一生懸命伝えようとする場面を想定していただくと分かりやすいかと思います。子どもが「今日ね、いっぱい遊んだよ」とお母さんに伝えようとします。

「今日ね、いっぱい遊んだよ」

『そうなの？ 何して遊んだの？』

「お絵かきした」

『そうなの？ お絵かきしたんだ。誰と遊んだの？』

「キミちゃん」

『キミちゃんと遊んだんだ。楽しかった？』

「うん」

このように、子どもの発話は言葉足らずで不完結なのですが、この不完結な言葉がむしろお母さんの関心や助け舟を上手に引き出し、一緒になって会話を紡ぎ出しているのです。これは会話分析などで「共話（きょうわ）」と呼ばれる現象ですが、言葉足らずであるにもかかわらず、コミュニケーションとしては非常に豊かな印象を受けます。これもまさに自立共生的な、お互いの自立性や創造性を奪わない程度に緩やかに依存し合う関係が築けるという点で、非常に興味深い現象だと思います。これを実際にロボットに実装して動かしてみますと、次のようになります。

「ねえねえ」

『なになに?』

「えっとね、えっと」

『うん』

「おもしろい人がいたんだよ」

『おもしろいこと? 教えて』

「すごいね、フィギュアスケートがすごいね」

『フィギュアスケートね、すごいね』

「そろと（それと）ね、高い得点でね」

『それですごいんだよ』

「フィギュアスケートのね」

「あのね」

時間がない時には少し焦ってしまうかもしれませんが、これくらい緩やかなペースで会話が進

みます。スマートスピーカーや最近の生成AIなどはもっと機敏に会話を返してくれますが、これくらい緩やかにつながっている方がかえって穏やかで豊かなコミュニケーションを構築できるように感じられます。このような「言葉足らず」な発話に加えて、物忘れをするロボットを作る試みも行っています。これは昔話を語り聞かせるロボットなのですが、あえてストーリーの一部を忘れさせてみるという実験です。実際の様子は次のようになります。

「あるところにね」

「おじいさんと川でね」

「洗濯をしていたら、どんぶらこと」

「大きなえつと…」

『桃！』

「桃が流れてきたんだって」

『桃、それだそれ』

「中から元気の良い男の子が」

「えーと、あのー…」

『男の子だよ！ 桃太郎だよ』

このようにロボットが時々物忘れをしたりすると、子どもたちの目が輝き出し、一生懸命に関わろうとします。ロボットも懸命に思い出そうと努めますし、子どもたちも「それはどういうこと？」と一緒に頑張って思い出そうとします。これこそが自立共生的な関係、すなわちお互いに緩やかに支え合う関係が築けるということであり、こうしたアプローチは学びの場のデザインなどにも応用できるのではないかと考えています。

また、最近私は「ブリコラージュ (Bricolage)」という言葉に注目しているのですが、これは「ありあわせのものでその場をしのぐ」という意味を持つ言葉です。これをロボットの発話に応用しようと試みています。例えば私がいま、このような場で皆さんの表情を拝見しながら、ありあわせの言葉を組み合わせて一生懸命に話をつなこうとしているような、そうした雰囲気の話話をロボットに実装してみると、意外にも緩やかに支え合う会話が生まれることが分かってきました。具体的には、言葉を言い直したり、言いよんだり、もう一度説明し直したりする、そんな

ロボットの開発に取り組んでいます。

「ね」

『好きな野菜は何？』

「小さくて、小さくてかわいらしい野菜の特徴なんだって」

「特徴なんだって」

『ミニトマト？』

「うんとね」

「確かにね、ミニトマト甘くて美味しいね」

「甘くて美味しいね」

「ちっちゃいの食べたよね」

『ミニトマト？』

ロボットが言いよんだり言い直したりすることで、子どもたちも警戒心を抱くことなく自然

に話しかけ、一緒になって会話に貢献し合うような状況が作れるのではないかと考えています。これもまさに自立共生的な、コンヴィヴィアル（共愉的）な関わりになっていると言えます。最近では、このように少し不完全で「大丈夫だろうか」と思われるようなものが、さまざまな場面で活躍し始めています。例えばあるロボットは、配膳ロボットでありながら自力では最後まで配膳しきれず、ちゃっかりとお客さんに手伝ってもらったりします。これも『弱いロボット』の一種と言えますが、手伝う側もなんとなく嬉しい気持ちになります。人間ができることは人間が一生懸命に行い、ロボットができることはロボットが一生懸命に行う。これこそが、コンヴィヴィアルな関わりだと思います。

あるいは、ロボットの話題からは少し離れますが、「注文をまちがえる料理店」という大変興味深い取り組みがあります。注文したものは別の料理が運ばれてきてしまうのですが、「こちらでも美味しうさだから、まあいいか」と、その間違いを受け入れて楽しんでしまうという企画です。なぜそのようなことが起こるのかと言いますと、ホールスタッフとして認知症の方々が働いておられるためです。周囲の人々が皆で一生懸命にその場を支え、状況を楽しんでしまう。これもまた、コンヴィヴィアルな関わりと言えるでしょう。現在、こうした考え方が社会のさまざま

な場面に浸透してきているように感じます。本日の後半では、コンヴィヴィアル、あるいはコンヴィヴィアリティという概念をご紹介しました。お互いの主体性や創造性を奪わない程度に、緩やかに支え合う関係性の大切さがお分かりいただけたかと思います。

おわりに ———ともに生きられる社会に向けて

最後になりますが、私たちはつい「何事も一人で完璧にできなければならない」と、自身を追い詰めてしまうことが少なくないように思います。しかし、本日さまざまな事例を通してお示したように、私たちの身体も心も、あるいは言葉でさえも、もともと不完結なものであり、そもそも外部に対して開かれた不完全な存在なのです。そうした認識に立ち、お互いの弱さを認め合い、時には周囲に委ねながら、互いに活かし活かされるような環境を築いていけたらと考えています。それによって、「ともに生き生きと生きられるような、コンヴィヴィアルな社会」を実現できればと願っております。私たちが開発する『弱いロボット』たちが、そのような社会を創り上げるための一つのヒントになればと考え、これまで研究を続けてまいりました。私の話

は以上となります。ご清聴ありがとうございました。

【文責宗教部】

《参考文献》

・ 鷺田清一 「二〇〇一」 『弱さ』のちから…ホスピタブルな光景』、講談社

(二〇二六年四月十六日 ご命日法要)

石ころも黄金^{こがね}に。
泥の中でこそ咲く蓮の花。

志賀 浄邦

(本学文学部教授)



志賀 浄邦（しが きよくに）

1974年、京都に生まれる。大分県出身。
京都大学大学院文学研究科博士課程修了。博士（文学）。日本学術振興会特別研究員PD等を経て、京都産業大学文化学部に着任。
現在、龍谷大学文学部仏教学科教授。

【著作】

「The Relationship between the Jainas and the Buddhist treatise *Tattvasamgraha* (-panjika) [仏教論書 *Tattvasamgraha* (-panjika) とジャイナ教徒の関係]」

（『ジャイナ教研究』29号／2023）

「シャーントラクシタ・カマラシーラ師弟と〈瑜伽行 (yogācāra)〉」

（『佛教学研究』82号／2026）

『社会苦に挑む南アジアの仏教 B.R. アンバードカルと佐々井秀嶺による不可触民解放闘争』

（共著、関西学院大学出版会／2016）

『シャーントラクシタ『真実集成』の原典研究 業報・論理・時間』

（起心書房／2022）

『インド哲学の万華鏡』（共著、春秋社／2025）

ほか多数。

讃題

如来の御ちかひをふたごころなく信樂すれば、攝取のひかりのなかにをさめとられまゐらせて、かならず大涅槃のさとりをひらかしめたまふは、すなはちれふし、あき人などは、いし・かはら・つぶてなどをよくこがねとなさしめんがごとしとたとへたまへるなり。

『唯信鈔文意』／『浄土真宗聖典―註釈版―』七〇八頁

みなさんこんにちは。本日はようこそのお参りでございます。私は文学部仏教学科の志賀浄邦と申します。本日の講話を担当させていただきます。

本日は新年度初めてのご命日法要ということで、四月に入学された新入生の方もこちらに来ておられるかもしれないし、配信で見てくださいいるかもしれません。また、大宮学舎での新しい学びが始まる新三回生の方、さらには大学院に進学された院生の方もいらっしゃるかと思いますが。ご入学、進学、誠におめでとうございます。新しい生活、新しい学びの始まりにあたり、多くの方が期待に胸を膨らませ、これからの生活を非常に楽しみにしておられることでしょう。し

かし一方で、新年度特有の不安や心配を抱えておられる方もおられるかもしれません。

もしかすると、友達がちゃんとできるのだろうか、あるいは単位はしっかり取れるのだろうかとか、あるいは就職はちゃんとできるのだろうかとか、この先研究をちゃんと進めていけるのだろうかなど、そういった不安を抱えている方もおられるかもしれません。あるいは、成り行きで第一志望ではない大学に来てしまったけどこのままでいいのだろうかという思いを抱いている方もおられるかもしれません。

本日は、基本的にインドの話と仏教の話をしたと思っていますのですが、そういった新年度特有の不安や心配、あるいはネガティブな感情を抱えている方々にも、少しでも届くようなお話ができればと思っています。

石ころも黄金に ― アンベードカルと親鸞に学ぶ人間の尊厳

今回の講題は「石ころも黄金こがねに。泥の中でこそ咲く蓮の花。」というタイトルにさせていただきました。これは「おうごん」ではなくて「こがね」と読んでいただけたらと思うのですが、初

めにこの前半の「石ころも黄金こがねに」という部分について、インドでのエピソードとともにちよつとお話できたらなというふうに思っています。まず皆さんに紹介したいのは、インドのビームラーオ・ラームジー・アンベードカル（一八九一―一九五六）博士という方のことです。この方はちょうど二日前の四月十四日にインドで誕生された人物で、近現代においてガンディーと並び称される偉人です。彼の誕生した日は「アンベードカル・ジャヤンティー」と呼ばれ、インド各地で様々な催しやお祝いが行われています。このアンベードカル博士という方は、いわゆる不可触民、カーストの最下層の出身で、幼少期から非常に苛烈な差別を受けながら人生を歩んでこられました。ですが学業成績が優秀で、アメリカそしてイギリスへ留学し博士号を取得して、最終的にはインドの方に帰ってきて、不可触民差別の撤廃そして平等な社会の実現に向けて尽力された方です。現地ではアンベードカル博士というふうに敬慕されて今でもインドの仏教徒たちの中心になる存在です。私自身は仏教論理学や仏教認識論、あるいはインド哲学特にジャイナ教の研究を専門にしていますが、一方で現代インドのことも興味を持って研究を進めております。特にこのアンベードカルという人物の思想と実践について研究を進めているということもありまして、定期的にインドの方に訪れたりもしています。つい先月の三月上旬にインドのマハーラーシュ

ラ州というところの西の方のプネーという都市に行ってきました。そこへ行った時は、現地調査を兼ねていまして、いろんな方からお話を聞く機会がありました。インドの仏教徒の方にもお話を聞く機会があったので、今回そのお話の一端を紹介させていただけたらと思います。

お話してくださったのは「ダンマチャーリー」と呼ばれているインド仏教徒の方でした。「ダンマチャーリー」の、「ダンマ」とは仏法のことです。仏教の教えのことですね。それを「チャーリー」、つまり実践する人というぐらいの意味なのですが、そういうふうに呼ばれて活動されている方がおられて、普段仏教を教えたり、瞑想の指導をされたり、社会において低い立場に置かれた方の支援など様々な社会活動をされている方でした。その方は、元不可触民の方で、インドではこのカースト問題はセンシティブな話題なので、なかなか大っぴらにあなたのカーストは何ですかとか、そういったことを軽々しく聞くのはタブーとされているのですが、その方は非常に真摯にこちらの質問に答えてくださっていろんな話をしてくださいました。その方のお話によると、ご本人は明確な差別を受けた経験はないとのことでしたが、祖父母の時代には深刻な差別があったと語られていました。たとえば、水飲み場で水を飲むとすると「お前は不可触民だから、ここが汚れてしまうから来るな」と水を飲むことを拒否されたり、あるいはヒンドウー

教徒であった元不可触民の方がヒンドゥー教の寺院にお参りに行こうと思つて中に入ろうとしたら「お前は不可触民だから入るな」と言われて棒で叩かれたりすることもあったそうです。しかしその一方で、犬や猫などの動物はどんな間を縫つて自由に寺院の中へ出入りしている。特定の人間だけが排除されるという非常に不条理な差別があったというお話をされました。現在では、インド憲法により不可触民差別は禁止され、基本的にはお寺に入ったりすることは大丈夫なはずなのですが、今でも何かしらの心理的抵抗があり、どうしても寺院に入ることにためらいを感じることがあるとおっしゃっていました。その言葉を聞いて、私はとても胸が痛みました。人間が人間を「石ころ」のような無価値な存在として扱うようなことが、少なくとも過去には確かにあったということ、その現実を改めて突きつけられた思いでした。その方は最後に「アンベードカル博士がいなければ、私たちは今こうして隣同士に座つて話すこともできなかった。だからアンベードカル博士にはとても感謝しています」とおっしゃられていました。アンベードカル博士はそれくらい敬愛をされている人物だということです。そして、私がその仏教徒の方との交流をしている中で思い浮かんだのが、本日のお題に挙げさせていただいている言葉でした。これは、親鸞聖人の『唯信鈔文意』の中からの引用になります。

れふし、あき人などは、いし・かはら・つぶてなどをよくこがねとなさしめんがごとしと
たとへたまへるなり。

（『唯信鈔文意』／『浄土真宗聖典―註釈版―』七〇八頁）

獵師・漁師や商人のような「当時社会的に低く見られがちだった」人々を、石や瓦や小石な
どを黄金に変えるように「尊いものへと転じ、悟りの境地に至らせる」という喩えである。

この文章の主語は如来であり、この文章の少し前の方に「摂取のひかり」という言葉がありま
すが、これは「摂取ゝ不捨ゝのひかり」ということですね。つまり、これは誰一人取り残さない、
そういう光です。誰一人取り残すことのない、そういう如来の智慧と慈悲の光ということかと思
いますけども、これを思い出して、親鸞聖人の考え方や思想というものとアンバードカル博士の
考え方や思想には共鳴し合う部分があるなというふうに思いました。それは、民衆と同じ目線に
立つということです。上から何か教えてやるという感じではなくて、民衆と同じ目線に立ち、人々
の苦悩に寄り添うという姿勢が共通しているのではないかと思います。現地の仏教徒の方もブッ

ダの教えを心の拠り所にして様々な活動に従事されております。彼らが現実社会の只中で利他的活動や慈善活動をされている姿を目の当たりにし、インド仏教徒が本当に黄金のように光り輝いているように見えました。

泥の中でこそ咲く蓮の花 —— 苦悩を糧に生きるということ

続いて後半の「泥の中でこそ咲く蓮の花。」についてお話します。この言葉に関しては『維摩経』という大乘經典の言葉とともに紹介させていただきたいと思えます。それは、このような言葉です。

譬えば高原の陸地には蓮華を生ぜず。卑湿の淤泥にすなわち此の華を生ずるが如し。

（『維摩詰所説経』「仏道品第八」／『大正蔵』第十四卷、五四九頁中）

たとえば、高原の陸地には蓮の花は咲かず、低く湿った、よどんだ泥の中にこの蓮の花は咲くようなものである。

この文章の中でまず注目されるべきものは「泥」です。ここでいう「泥」とは、人間の煩惱とか苦悩とかそういったネガティブな部分のたとえ、比喩になっているわけです。釈尊の頃の仏教においては、煩惱とかそういったものは除去されるべきものだったわけですが、大乘仏教では成長のための栄養分や糧になっていくものというポジティブな考えにだんだんシフトしていきます。この文章は、高原のような清らかな場所には花は咲かず、泥の中でこそ花が咲くんだという意味の言葉かなと思いますが、ネガティブな煩惱や泥、そういったものに対する価値観の一大転換が大乘仏教、特に『維摩経』の中で起こっています。実際の蓮も、綺麗な澄んだ水の中に入れても花は咲きますが、小さな花しか咲かせられない。一方、汚い泥の中で育てれば、大輪の花を咲かせるそうです。この『維摩経』における比喩はいろいろと考えさせられるところがあるなと思います。親鸞聖人も『唯信鈔文意』の中でこの言葉を引用されて解説をなされています。

ここで、私の担当していたあるゼミ生のことを話したいと思います。私は実は去年の四月に他大学から龍谷大学の方に移籍してまいりました。その時の前任校で担当したゼミの卒業生の話です。その学生が私のゼミに来たのは、彼が四回生の時でした。彼とはゼミ生になる前にも面識が

あったのですが、四回生の段階で修得単位数がほとんどなく、心配して話しかけてみたのですが、いざ喋ってみると非常に聡明でユーモアにあふれていて、コミュニケーション能力も非常に高い学生でした。よくよく話を聞いてみると、なんとなく自分に自信が持てなくて、それでだんだん生活が乱れ昼夜逆転の生活になり、引きこもりになっていった、徐々に大学に行けなくなったとのことでした。それで単位も十分に取れずに今に至り、こんな姿を人に見られたくない、友達はあるものの、なかなか大学に行けないんだと、そういう話をしてくれました。ある時、その学生から「大学を辞めたいと思っているんです」というふうに相談を受けたこともありました。私自身はどういうふうに答えればよいか悩みました。そして、ご家族の思いも踏まえ、ちよつとでもインドや仏教のことを学んでいて面白いと思うんだたらもう少し頑張ってみたらどうか、とアドバイスしたのです。その後、何がきっかけになったかわかりませんが、本当に人が変わったように非常に意欲的で勤勉な学生に変貌しました。ゼミの中でもとりわけ意欲的でした。ゼミ発表もしてくれました。それからゼミの中心人物という感じになって後輩からも慕われ、様々な学内の活動なんかに参加するようになり生き生きしはじめました。大学の年限は七年ということでしたが四回生から頑張って七年目に無事に卒業できました。

本当にこれは感無量だったエピソードです。それから十年以上の年月が流れました。今彼はスリランカの仏教寺院に併設されている日本語学校で、現地の若者に日本語を教える仕事をしています。それまでは普通に就職していましたが、自分の夢を諦められないということで日本語の教師の資格を取りました。たまたまいた私の知り合いを紹介したところ、スリランカに渡り、今もスリランカで日本語教師を続けています。私も実は数年前にスリランカに行く機会があって、彼と久しぶりに再会しました。現地でも非常に活躍してくれているようで、現地の生活に馴染んでいる様子がうかがえました。居住環境のよいゲストハウスは使わずに、お坊さんと同じ僧坊で暮らしており、周りからは感心されているようでした。同僚の先生やお坊さん方には「あなたの前世はスリランカ人だったに違いない」というふうに言われるぐらい馴染んでいました（笑）。ぜひ出家されてはどうですかと言われたりもしているみたいでしたが、出家は今現在しておりません。再会した時に、じゃあちよっと喋ろうじゃないかということになって、スリランカのお洒ななかを飲みながら深夜まで語り明かすという時間もありました。その時彼は私に「僕は卒業後ずっと考えていることがあるんです。自分の命を無駄にしたくない、自分の命の使い方を考えているんです。やっぱり僕は何か人の役に立ちたいんです」と話してくれました。その時の表情が

非常に決意に満ちていて、希望にあふれていたもので、それが今でも忘れられません。彼の変貌ぶりを見るにつけ、本当に人は変われると思いました。まさしく異国の地で大輪の花を咲かせている。過去にいろいろあったけれど、それでもその過去を糧にして花を咲かせていると感じた次第です。今も彼とのやりとりは続いています、頑張っしてほしいと思っています。

泥を受けとめ、根を育てる —— 人生を支える見えない力

最後に「泥」に向き合い受けとめること、「根」を育てることについて、少しだけお話しします。まずこの「泥に向き合う」ということが大変なことですよ。私たちは泥、つまりはネガティブな感情を感じてしまったり、いろんなタイミングでそれが降りかかってきたりすると、どうしてもそれを取り除きたい、きれいさっぱりすっきりしたいというふうに思ってしまうのですが、そういうふうに簡単に解決しない方がいい場合もあるのではないかと思います。それともう一つは、この泥を栄養分として成長の糧にしていくなめには、根っこをしっかり張らないといけないということです。根っこというのは外側からは全く見えませんが、土の中でしっかりと根を張っ

ていれば、そこから自然と栄養分を吸い上げて、やがては大輪の花を咲かせることができます。それでは、どうやって根を育てていけばいいのでしょうか。これはいろいろなことが言えますが、様々な経験を積むことであったり、旅に出ること、あるいは失敗や逆境としつかりと向き合うということであったり、自分の静かな時間、内省の時間であったり、本を読む時間を持ったりとか、そういうことによって自分の根を育てていく必要があると思います。また、「カリヤーナ・ミトラ」という言葉があります。カリヤーナ・ミトラの意味は、漢訳で「善友」、あるいは「善知識」と訳されたりします。優れた友との出会いということです。また、このミトラという言葉には、師匠や導き手あるいはメンターという存在も含まれます。そういった存在との出会いが、人生を変えていくということがある。そういう善き友、カリヤーナ・ミトラを大切にしていってほしいなというふうに思っております。

明治時代の浄土真宗大谷派の僧侶に近角常観（一八七〇—一九四二）という方がおられるのですが、この方は若い頃人間関係に悩んで病気がちだったそうです。病院から退院するときに、帰る道で空を見上げた時にこのような思いを抱いたと著書の中に書かれています。

永い間自分は真の朋友を求めて居ったが、其理想的の朋友は仏陀であることが解った

(近角常観『懺悔録』三〇―三二頁)

この「真の朋友」という言葉について、おそらくカリヤーナ・ミトラという言葉が念頭にあったんじゃないかと思えますけども、その後近角氏はこの体験をもとに様々な場所で、人々の心を打つような法話をされたといえます。仏陀を真の朋友とする生活、この「仏陀」のところには釈尊が入るかもしれないし、阿弥陀如来が入るかもしれない。様々な仏陀が入るかもしれないと思いますが、そういう人生を送るにあたってこの龍谷大学という場は最適な環境なのではないかと思えます。かくいう私も、迷いながら、もがきながら、仏陀を真の朋友とする人生を送っていきたいなと思っている人間の一人です。長くなりましたが法話の方は以上とさせていただきます。ご清聴いただきありがとうございました。本日はようこそのお参りでした。

【文責宗教部】

(二〇二六年六月十五日 お逮夜法要)

かけがえのあるもの

嵩 宣也

(本学文学部講師)



嵩 宣也（だけ のぶや）

1988年、京都府出身。

関西学院大学文学部文化歴史学科卒業。龍谷大学大学院文学研究科真宗学専攻博士後期課程修了。博士（文学）。龍谷大学非常勤講師に着任。現在、龍谷大学文学部真宗学科特任講師。立命館大学大学院先端総合学術研究科研究指導助手（英語）等。

【著作】

「The Construction of History in English Translations of Shin Buddhist Texts: Through the Creation of the Bibliography of Japanese Buddhist Texts」

（『The Journal of World Buddhist Cultures』 6号／2023）

「真宗教義の翻訳と再構築－明治・大正期「真宗セオロジー」の形成」

（『真宗學』 153・154号／2026）

「共創された仏教：日本仏教とポール・ケーラスの思想交流」

（『禅からZenへ－日本仏教のグローバル化と靈性運動』所収、法蔵館／2026）

【翻訳】

「スティープン・パチュラー「世俗仏教」」

（『世俗仏教の倫理と死の意味の哲学』所収、武蔵野大学出版会／2025）

ほか多数。

自己紹介

みなさん、ようこそそのお参りでございます。文学部の嵩宣です。今日のお話のタイトルは、ご覧いただいているように「かけがえのあるもの」です。おそらく多くの方は「かけがえのないもの」という言葉を聞いたことがあると思うのですが、あえてこのような法話の講題とさせていただきました。「かけがえのないもの」というのは、「命はかけがえのないもの」とか「あの出会いがかけがえのないものだった」とか、そんな風に使うわけですけど、今回は「かけがえのあるもの」ということで、そのタイトルも含めてこれからみなさんと一緒に考えていければと思っています。

若いころの「かけがえのないもの」

本日は多くの学生さんが参拝に来てくださって僕自身とても嬉しいなと思うんですけど、こうして見渡すと当たり前ですがみなさん若い時代を生きていらっしやいます。若い頃というのは、

「かけがえのないもの」を求めずにはいられない時期です。

この「かけがえのないもの」について考えるとき、仏教には、「母親の慈悲」を「如来の慈悲」に重ねる伝統があります。なぜ母親なのか。みなさんがこの世に生まれてくるとき、お母さんは約二八〇日間（十月十日）ただ待っていました。現代はこれだけ文明が発達して、スマホ一つで世界中の情報が手に入り、AIが絵を描き、文章を書き、診断さえする時代です。しかし、このような時代になって子どもが早く生まれてくるようになったかという決してそんなことはありません。命が生まれてくることだけは、待つ以外に何もできないからです。

その二八〇日の間、お母さんは何を思っていたでしょうか。「元気に生まれてきてくれたらそれだけでいい」「どんな子でも、この子でなければ」——そういう気持ちだが、自然に湧いてくるのではないのでしょうか。生まれてくる前から、すでに、かけがえのない存在として待たれていて、産声が聞こえた瞬間、母親にとってその子は世界で唯一の替えのきかない存在になるわけです。

仏教はまさにその母親の姿に如来の慈悲を重ねてきました。どんな子であっても、どんな状態であっても、ただそのままを抱きとめようとするのです。その子が大きくなったかどうか。みなさんも経験があるかもしれません。夜遅く帰ったとき、家の灯りがついていて、ということとはな

いでしょうか。親はそこにいて特に何も言わない。でも、ただ待っていてくれます。思春期のころ、みなさんも「ほっといてくれ」とか、「ちょっと鬱陶しいな」とか思ったことがあるかもしれません。でも今、振り返ってみるとどうでしょうか。その灯りは、言葉にならない「あなたはかけがえのない存在だ」という意志の表れだったのではないのでしょうか。親は何も求めずただ待っています。その姿に、「待つ」という行為の本質があると思うのです。

注目してほしいのはこの「待つ」という言葉なんです。突然ですが、少し昔の話をさせてください。みなさんは携帯もスマホもなかった時代を想像できますか。例えば、昔は友達や恋人に連絡する時には家の固定電話にかけるしかありませんでした。ドキドキしながらダイヤルを回して呼び出し音が鳴ると、出てきたのが相手のお父さんだった（笑）。無言でそつと電話を切る。そんな経験が僕にもあります。それでも電話の折り返しがかかってくるのを何時間でも、何日でも「きつ」といつか、気持ちが届くかもしれない」と思って待てたのです。

しかし、現代はいかがでしょうか。時代はLINEへと移り変わり、メッセージを送信すると相手が読んだかどうか「既読」という形で可視化されるようになりました。その結果、既読がついたにもかかわらず返信が届かないと、途端に大きな不安に襲われることになります。時間が

経つにつれ「なぜ返信が来ないのか」「既読スルーにはどういう意味があるのか」「何か気を悪くさせることをしたのだろうか」「もしかして嫌われてしまったのではないか」といった思考で頭の中が支配されてしまうのです。こうなると、授業中であっても、食事中であっても、スマートフォンを片時も手放せなくなってしまうです。みなさんにも、このような経験や思い当たる節はないでしょうか。哲学者の鷺田清一さんが、こんなことを書いています。

かつて『待つ』ことはありふれたことだった。一時間に一台しか来ない列車を待つ、数日後のラブレターの返事を待つ、果物の熟成を待つ、酒の発酵を待つ、相手が自身で気づくまで待つ……『待たない社会』、そして『待てない社会』——そういうものへの感受性をわたしたちはいつか無くしたのだろうか。

（鷺田清一『待つ』ということ 九—十頁）

親が子を待つ。新たな命が生まれてくるのを待つ。列車を待つ。あるいは、ラブレターの返事を待つ——。かつて人間は、「待つこと」と深く付き合ってきました。その証拠に日本語には「待

「つかかわる言葉がたくさんあります。皆さんもぜひ調べてみてください。『待ち焦がれる』『待ちくたびれる』『待ちぼうける』『待ちあぐねる』といった言葉がこれほど豊かに存在しているのも、それだけ『待つ』という行為が人間の営みの中心にあったからではないでしょうか。

先ほど紹介したように、固定電話の時代は何日でも待つことができました。携帯電話の時代になっても、相手からの返信を信じて待つ猶予がありました。もっといえば昔は電話なんてみんな持っていないわけです。なのでどこか集合場所を決めて、来るかどうかわからない人を待つ。そういったことが日常的に行われていたわけです。それがLINEになった途端、既読がついてからわずか数分で不安に陥ってしまうのです。ラブレターを数日間も待ち続けられた人間が、返信既読五分以内で願います、みたいな感じになるわけです。そして、母親の胎内で二八〇日間も待たれて生まれてきた命が、ほんの数分の返信を待てずにいる。かつて灯りをつけて帰りを待ってくれた親がいたにもかかわらず、今の私たちは一分すら待つことができません。

これまで「待つ」とか「待てない」という言葉について考えてきたわけですが、この「待てない」とは一体どういう状態を指すのでしょうか。それはですね、おそらく「今すぐ答えが欲しい」「今すぐ確かめたい」など「かけがえのないもの」にしがみつく心というものが我々にあるから

ではないでしょうか。「この人でなければダメだ」「この人がいなければ、自分はどうにかなってしまふ」という強い執着が、待てない心を生み出しているのです。さらに昨今では、生成AIの発展によって効率化が極限まで進み、この「待てない傾向」はより加速していくのではないかと危惧しています。

具体的な例を挙げてみましょう。インスタグラムや「~~ス~~」を開くと、友人が海外旅行を楽しんでいる姿、内定を獲得した報告、恋人ができたという報告などが目に入ります。それらを目にするたび「なぜ自分だけが取り残されているのだろう」と感じてしまふ。周囲の誰もが「かけがえのない幸せ」を手に行っているように見えるものです。しかし、その輝いて見える当人もまた、別の誰かの投稿を見ては同じように羨んでいるのかもしれない。このような「執着が苦しみを生む」という真理は、実にお釈迦様が二五〇〇年前に見抜かれていたことなのです。

諸行無常 — かけがえのないものなんて、ない

仏教には、広く知られた「諸行無常」という言葉があります。「すべてのものは移り変わり、

決して同じ状態にとどまることはない」という教えです。この言葉に対して、「どうせ何も続かない」「いずれ失われてしまう」といった、どこか暗く諦念に満ちた響きを感じる方もいるでしょう。「そんな虚しいことを言われても困る」と思うかもしれません。しかし仏教は二五〇〇年前から、この人間の根源的な問いに向き合い続けてきました。よく考えてみれば、これは「待てなくなった私たち」に向けて、真正面から語りかけてくる言葉だと気づきます。「変化を恐れるな。何事にもしがみつくな。そもそも、かけがえのないものなど存在しないのだ」と、そんなふうに語りかけて「かけがえのないもの」への執着という重荷をそっと下ろしてくれる言葉ではないかなと私は考えています。

先ほどの灯りの話を思い出してください。母親はあなたを二八〇日間待ち続け、親は灯りをともしてあなたの帰りを待ってくれました。しかし、その愛情の形も時の流れとともにやがて変わっていきます。だからこそ、今ここにある「縁」が美しく輝くのです。

SNSの話も同様です。他者が持っているものが、まるで「かけがえのない特別なもの」のように見えたかもしれませんが、しかし、その当人もまた別の誰かを見て同じように焦がれている。そうであるならば、「かけがえのないもの」を持っている人など、この世界には初めから一人も

いないのではないでしょうか。諸行無常とは、決して悲哀の言葉ではありません。むしろ、私たちが前を向いて生きるための言葉です。「かけがえのないもの」への執着という重い荷物を、そつと下ろしてくれる言葉なのです。そして、その荷物を下ろしたとき、初めて見えてくるものがあります。だからこそ——「かけがえのあるもの」を大切にする。「かけがえのないものなどない」とするならば、私たちはどう生きるべきか。だからこそ、変わりゆく、代わりのきく「かけがえのあるもの」を、今この瞬間に大切にしなければならぬのです。

みなさんのスマートフォンの写真フォルダに入っている、最も古いデータはどのようなものでしょうか。機種変更をしたばかりの方であれば、まだフォルダにほとんど写真が入っていないかもしれません。一方で、二年前、三年前の写真がそのまま残っている方もいるでしょう。高校時代の友人と笑い合っている写真、あるいは、家族で食卓を囲んでいる写真——。当時はそれを「当たり前」の日常」だと思っていたいなかったでしょうか。「またいつでも会える」「次の機会がいい」としかし、あの日の夕食をもう一度食べることはできません。あの瞬間に流れていた友人たちとの空気感も、二度と戻ってはこないのです。もし当時、「この時間はいつか終わってしまう」と気づいていたなら、私たちはもう少し「ありがとう」と言葉にできていたのではないのでしょうか。

その時間は、今日という日にしか存在しません。今日のその人との会話は二度と繰り返されることはないのです。

「どうせすべては変わってしまうから」と冷淡に流してしまうのではなく、「いつかは変わる。だからこそ、今この瞬間を大切にする」。これこそが、諸行無常という教えを本当に受け取ったときに開かれる、もう一つの世界です。「かけがえのないもの」への執着を手放したとき、今ここにある「かけがえのあるもの」を持つ、本当の尊さと重みというものに私たちは初めて気づくことになるのではないのでしょうか。

翻訳者たちの格闘 ―― 「本願」は英語にできるか

「いつかは変わる、だから今を大切にする」ということは、頭では理解できていても、実践するのはなかなか難しいものです。いざ「目の前の人に感謝しよう」と思っても言葉が出てこない。「このご縁を大切にしよう」と思いつつ、気づけばスマートフォンを開いてしまっている。これは決して他人事ではなく、他ならぬ私自身の正直な姿でもあります。

ここで少し視点を変えて、私の研究分野のお話をさせていただきます。私は、浄土思想の言葉が明治・大正時代にどのように英語へ翻訳されてきたか、その歴史を研究しています。翻訳とは、ある言葉を別の言葉に「替える」作業です。つまり「かけがえ（替え）」であり、今日のタイトルにも深くつながってきます。

浄土教の根幹に、「本願」という言葉があります。阿弥陀仏が、すべての衆生を救うと立ててくださった根本の願いのことです。この言葉を英語に翻訳しようとした際、初期に用いられた訳語は「Prayer（祈り）」でした。しかし、これには大きな問題がありました。キリスト教圏の人々にとって、「祈り」とは教会で手を組み、神に向かって「どうか助けてください」「どうか導いてください」と語りかける行為です。つまり、人間の側から神への働きかけを意味します。「本願」を「Prayer」と訳してしまうと、阿弥陀仏の願いがまるで私たち人間からの「祈り」であるかのように誤解されてしまうのです。

本来、「本願」はそれとは逆のベクトルを持っています。私が阿弥陀仏に祈るのではなく、阿弥陀仏の側から私に向かって「必ず救う」と誓ってくださっている働きなのです。この方向性の逆転が、「Prayer」という言葉には収まりきりませんでした。そこで次に採用されたのが、「Vow

（誓い）」という言葉です。一方的に力強く誓うこと。人間の側の行為ではなく、「必ずあなたを救う」という阿弥陀仏の側の揺るぎない意志（誓願）を表しています。

これを、本日のお話に重ね合わせてみてください。私たちはこれまでずっと、「かけがえのないもの」を求める側にいました。「この人でなければ」「この場所でなければ」と、こちらから懸命に手を伸ばし続ける。それはまさに「Prayer（祈り）」の姿です。しかし、「本願」は違いました。私たちが求めるより先に、阿弥陀仏の側から「必ず救う」「必ず迎え入れる」という誓いが立てられ、その誓いの中に、最初から私は包まれていたのです。

懸命に「求めている」はずの私が、実は初めから「願われていた」存在だった——。これが、「Prayer」から「Vow」への逆転が意味するものです。こうした歴史を経て、現在「本願」は「Original Prayer」ではなく「Original Vow」と訳出されています。そして、この大いなる逆転を、単なる翻訳上の言葉としてではなく、ご自身の人生をかけて丸ごと体験されたのが親鸞聖人なのです。

如來の眼まなこ

では、親鸞聖人はどのようにして教えと出遇われたのでしょうか。最後に、親鸞聖人ご自身のお話をさせてください。ご承知のように、親鸞聖人は九歳で比叡山に登られ、二十年間にもわたって厳しい修行を積まれました。二十年という歳月は、学生のみなさんにとっては生きてこられた年数そのもの、あるいはそれ以上の途方もない時間かもしれません。しかし、それだけではありません。学生のみなさんは今、ちょうどその二十年の只中を生きています。つまり、当時の親鸞聖人と全く同じ場所に立つておられるのです。

その二十年間、親鸞聖人は何を求めておられたのでしょうか。それは「かけがえのないもの」を探しておられたのだと私は思います。どうすれば悟りを開けるか、どうすれば真実に到達できるか。「生死いづべき道」はどこにあるのか。そういったものを求めて、迷いの世界を抜け出す道を自らの修行によってなんとか見出し、解決しようとされた。しかし二十年の末に、親鸞聖人はご自身の力ではその答えを得られませんでした。そしてついに比叡山を下り、法然聖人のもとへ向かわれます。そこで出遇われたのが、阿弥陀仏の「本願」である「必ず救う」という誓いだっ

たのです。その体験を経て、親鸞聖人は『歎異抄』の後序にこんな言葉を残しておられます。

煩惱具足の凡夫・火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもつてそらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておはします。

『歎異抄』／『浄土真宗聖典―註釈版―』八五三―八五四頁

「よろづのこと、みなもつてそらごとたわごと、まことあることなき」とは、この世のあらゆることは、空言であり、戯言であり、真実などない。これは、二十年間の血の滲むような修行の末に辿り着かれた言葉です。二十年かけて探し続けた「かけがえのないもの」が「そらごと・たわごと」であつたわけです。みなさんは、ご自身の人生を振り返ってこのようなことが言えるでしょうか。なかなか言えることじゃないと私は思います。「諸行無常」、つまり「かけがえのないものなどない」という事実を親鸞聖人はご自身の二十年を通して、身をもって知られたのです。

しかし、そこで終わりではありません。この世のあらゆることは、空言・戯言である中で、ただ一つ、真実であるものがあつた。それが念仏、「南無阿弥陀仏」でした。ですから、「よろづの

こと、みなもつてそらごとたわごと」という言葉は決して絶望の言葉ではありません。むしろ、執着していたものをすべて手放したとき、前に進むのをやめて立ち止まったときに初めて見えてきた、大いなる境地なのです。

ここで誤解していただきたくないのは、親鸞聖人の教えは、最初から「どうにもならないから全く頑張るのをあきらめましょう」と、「かけがえのないもの」を何も望まないような冷めた生き方を勧めているわけではない、ということです。それは、一步も動いていない「ゼロ度の他力」、ただの諦めにすぎません。

そうではなく、必死に「かけがえのないもの」を望み続け、もつと遠くへ進もうと、一〇度、九〇度、一八〇度と懸命に人生を歩み続ける。そして一周まわりきり、自分の力ではどうにもならない限界にぶつかって立ち止まったとき、初めて出遇うものがあるのです。遠くへ進もうともがいたからこそ、足元にあった真実に出あう。「ああ、私は最初から、三六〇度すべての方向から如来様のおはたらきに包まれていたのだ」と気づかされるのです。ゼロ度の他力と、三六〇度の他力は、まったく違う次元のものです。そして、比叡山で二十年間、「かけがえのない真実」を求めて必死に進み続け、挫折した親鸞聖人はさらにこう続けておられます。

弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。

（『歎異抄』／『浄土真宗聖典―註釈版―』八五三頁）

ここでいう「五劫」とは、想像を絶するほど気が遠くなるような時間のことです。阿弥陀仏は、その途方もない時間をかけて「どうすればすべての衆生を救えるか」と思惟された。その本願が、「ひとえに親鸞一人がためなりけり」——みんなのため、という抽象的な話ではなく、「この私人」のために、如来は五劫もの時間をかけて誓いを立ててくださったと仰るのです。

ここで、もう一度本日のタイトルに戻ってみましょう。「かけがえのあるもの」でした。現代社会は、私たちのことを「いくらでも替えがきく存在（かけがえのあるもの）」として扱う側面があります。スキマバイトアプリの「タイミー」や、退職代行サービスの「モームリ」などが流行しているのもその象徴でしょう。簡単に辞めることができ、私たちが抜けてもすぐに別の誰かがその穴を埋めていく。私たちは日々、「自分は替えのきく存在なんじゃないか」という不安と戦っています。だからこそ、必死に「自分はかけがえのない存在だ」と証明したくて、もっと遠くへ進もうともがいているんです。私自身だってそうです。

でも、三六〇度まわりきって、どうしようもなくなって立ち止まったとき、阿弥陀如来だけは、あなたを『絶対に替えのきかない、あなた一人（かけがえのない存在）』として見つめています。

懸命に求めていた私 (Prayer) が、実は、最初から丸ごと願われていた (Love)。世間にとって「かけがえのある（替えがきく）」あなたを、そのまま「かけがえのない（替えのきかない）」ものとして、三六〇度全方位から照らし、待つてくださっている存在がある。その絶対の安心のなかで、じつくりと、しかし着実で大胆に、今ここにある歩みを三六〇度に向かって進めるような私であり、皆さんであればうれしいなというふうに思います。本日は尊いご縁をいただき、本当にありがとうございました。

【文責宗教部】

《参考文献》

・ 鷺田清一 「二〇〇六」『待つ』ということ、角川学芸出版

本書には、二〇二五年度から二〇二六年度にかけて開催された宗教部主催の法要および公開講演会のうちから、五篇を掲載いたしました。ご協力いただきました先生方、ならびに刊行に携わっていただいた多くの方々に心より感謝申し上げます。

今日、AIの進歩は目まぐるしく、私たちの生活の基盤になろうとしています。一方で、AI大手企業がその開発競争に警鐘を鳴らしているように、AIによって生活の安全性が脅かされる事態も生じています。人類の歴史を振り返れば、技術の進歩は我々に多くの幸福と希望をもたらすと同時に、不安や絶望ももたらしてきました。「技術」とそれを使用する「我々」との距離感には、常に悩まされてきたと言えます。

その悩みの一端は、「我々」が何に幸福や希望を見出し、何をなしていくべきなのかが定まっていない点にあるのではないでしょうか。技術の進歩は、今後あらゆる分野においてとどまることはありません。その進歩が何のためにあるのか、「我々」はどのような未来のために行動していこうとしているのかを、自らに問い続けたいものです。本書に掲載した五篇のご講演が、その問いを深める機会となることを願っております。

(宗教部)

わからなさ友達になる

「りゅうこくブックス」No.140

二〇二六年十月十八日 発行

編集 龍谷大学宗教部

発行 〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67

現代社会における仏教の存在価値	佐々木 閑
わからなさ友達になる	小山田 徹
〈弱いロボット〉から考える 人・社会・生きること	岡田美智男
石ころも ^{こがね} 黄金に。 泥の中でこそ咲く蓮の花。	志賀 浄邦
かけがえのあるもの	嵩 宣也

